



校友會雜誌

第五號

明治三十三年六月發行

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第五號目次

論 說

- 校風の振興につきて
- 演説と文章
- 己を頼め
- 活動の本源は何か
- 平和の戦争

雜 錄

- 忘餘錄
- 講餘漫錄
- 游言錄
- 幾何問題の解
- 思ひ出放題
- 心のまゝに

英 文

The True Gentleman. Hakuzo Iwata.

詞 藻

- 對水の詞
- 鳥は
- 異郷の友
- 暮春の川邊
- 前原騷動
- 異郷の夕暮
- 逍遙吟
- 世
- 長州男兒
- 競漕會
- 長門の國
- 落花
- 故雨谷校長の一周年祭に
- 校旗
- 春二首
- 春のこゝろ
- 萩の四季
- 露の野

會友

- 阿川 舩浪
- 彌政 三如
- 藤野 紫郊
- 梅田 吉郎
- 藤井 醇一
- 廣兼 來藏
- 大賀 幾太
- 三浦 榎東
- 田坂 榮助
- 桑原 雅亮
- 石川 光一
- 田中 貢
- 安藤 紀一
- 同
- 中子 舟月
- 彌政 三如
- 木原 直孝
- 同

●春十首
●俳句五句

香積 鶯水
富田 小人

表。生徒年齢調査表。生徒宿所種別表。三十八年度生徒移動表。武學貸費生表。卒業生一覽。

通信

●東都だより
●駒場より
●河野通毅君より
●吉富嘉春君より
●三戸基介君より

會友 永田 民也
會友 厚東健次郎

雜報

塚本校長の轉任。羽石校長の來任。舊師を送り新師を迎ふ。眞鍋中將の來校。光藤健介君の葬儀。戰勝祝賀式。片岡田原兩君の永眠。兩谷前々校長の一年祭。校旗發表式。觀戰談。元諸先生その他の凱旋。桂伯の來校。第六回卒業式。指月會の發展。本校日誌。編輯餘瀝。

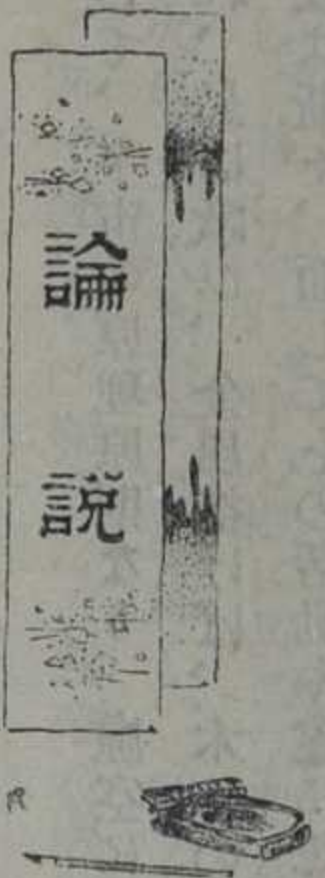
校友會記事

本會役員。校友會の三事業。陸上運動會。高商との仕合。擊劍柔道部記事。文藝辯論部記事。決算報告。

附錄

山口縣立萩中學校沿革略。職員表。學級數及生徒數表。生徒郷貫別調査

山口縣立萩中學校 校友會雜誌第五號



校風の振興につきて

羽石重雄

校風は、一校の生徒をして、翕然として其歩調を一ならしむる底のものたらざるべからず。校風は内部に異質分子の存在を許さず。若し、偶々入り來ることあるも、忽ち同化し去るの勢力を有し、又外部に非議嘲笑の聲を放つものあるも、泰然として動かさず。若し已むを得ずして奮然蹶起するに至らば、滿腔の心血を濺ぎて、縱横無盡に活動し、敵手をして屈服せしめざれば已まざる慨ある底のものたらざるべからず。校風は、舊套にのみ拘泥せず、時世の發展に伴ひて活動進歩する底のものたらざるべからず。校風は一分子たる箇人に於ても認められ得べくして、而かも、他人の見て以て羨望する底のものたらざるべからず。而して、此の如き校風は我校に有りや無しや。斯の如き校風は余輩は未だ我校に於て認むること能はざるを遺憾とす。

急なる哉、急なる哉、我校に於て校風の振興を要する。而して、苟も籍を本校に有するものは、奮つて之れが振興の責に任せざるべからず。

校風を振興する道、夫れ如何。校風を振興する道は幾多之れ有るべしといへども、愛校心を喚起するより先なるはなかるべし。生徒の胸裡一片常に學校を思ふ念慮の存するありて、學校の家屋器具を見ること我家の家屋器具を見るが如く、學校の毀譽を聞くこと我身の毀譽を聞くが如くならしめば、知らず／＼の間に、校風の斐然として見るべきものあるに至らん。希くは生徒諸子よ。此に留意して。日夜各自の行動につきて反省する所あれ。而して學校を愛するは、自己を愛する所以にして、眞個自己を愛するの道を知るは、亦學校を愛する所以に外ならざることを記憶せよ。

演説と文章

堀 田 幾 太 郎

活動は萬有の眞諦にして、宇宙の原理原則なり。虚空に懸る日月よりはじめて、凡ての星體は、公轉私轉はた又推移す。水は流れ、鳥は歌ひ、金風搖げば、木々の梢も錦なす衣をも棄つ。すなはち、萬物活動し、人間活動す。或は泊々或は浙々、而してその活動や遂に熄むことあらざるなり。かるが故に、一日休止すれば一日沈滞し、一日沈滞すれば、一日腐敗を生ず。活動は向上態にして沈滞は墮落態なり。靈火内に燃ゆるあれば吾人の口緘せられ、四肢慄くのみにて動作することなきが如しと雖も、吾人内臓の精神は、常住不斷に

活動せるなり。空想を恣にし、夙夜書冊を究むる時、これ決して休止にあらずして、吾人心靈の大活動なり。然りと雖も、中心喬木にして向上なく、理想なく、且、筆動かず口黙するは、恐らくは、これ、眞個に活動なき人となるるなるべし。若しそれ、中心既に眞の活動あらば、人たるもの、豈、永く沈黙に堪へ得むや。低氣壓の起るが如く、噴火口より吹き出す煙の如く、必ずや、何れの方面にか、活動の門戸を求めて、氣焰を洩さずば已まざるべし。乃、發しては爛漫たる萬葉の櫻ともなり、聳えては、雲際に出づる富嶽の秀麗ともなりぬべし。或は、出師の表、正氣の歌となりイリヤッド、オジッシーの詩集となり、はたまた、デモスセチスの雄辯パークの徒の演説となる。

演説と文章、これ吾人活動の武器とも稱すべきものなり。低氣壓なり、噴火口なり。徒に沈黙を守り、思ふこと云はて止まむは、腹ふくるゝわざなり。若かず、英氣あるの士、不満を抱くの徒、苟も、一藝に至り、深く或は堂上に立たずとも、猶熱誠眞摯、事を愛へ、後進の士を指導せんとするもの、須らく、大に天晴天下の壇上に立ちて、吼哮すべし。我が帝國已に露國と互に理非を旗鼓の間に争ひ、我が鱗鱗魏魏が、龍驤虎鬪の効績已に偉大なり。一旦、ポオツマスの一報を受けたる國民。戰勝後の飛躍すべき吾人は、大に奮ひて二十世紀の活舞臺に帝國の光彩を層一層飾るべき活動を怠るべけむや。今や幸に我が萩中學校文藝辯論部は文章に演説に、漸く振興せむずる傾向を作せり。怠る勿れ、四百の健兒、これらをして益盛大ならしめ、以て、將來の素地を形成すべきなり。何ぞ、區々として、前を慮り、後を顧みて、遂に能く何事をも成す無きに了る愚を演ぜむや。當に、直往邁進あらむのみ。少くとも、吾人、多少の書を讀むとを得て、思想界の宏きに遊ぶもの、かの進軍の武器たるを得るものは、豈演説と文章とにあらざらむや。文章をよくするもよし、演

説の鋭鋒當るべからざるもよかるべし。演説と文章とを、かねてこれをよくせば、いよいよよからずや。兩者の得失に至りては、未だ俄かに判知すべからざれども、吾人は兩者を兼有するを期せざるべからず。夫れ、文と言とは、もとこれ一の如し。これを口にして抑揚をなし、これを筆にして修飾を付せむも、これ技工の末のみ。吾人に大精神あり、大熱誠あり、大氣力あらば、何ぞ技巧を問ひ、身ぶりを云々せむ。必ず風の蓬然として其の止まるところに任するが如くして可なり。事物に凝滞し、他に顧慮するが如くば、到底大演説家たり、大文章家たること能はざるべし。

大凡、物には權衡といふものあり。我校友會は、擊劍に、柔道に、球術に、すべて振起の運に向へり。我が文藝辯論部にありても、之に伴ふ隆盛を致さしむるは、余輩の切に希望して止まざる所なり。

己を頼め

善 甫 正 三

嘗て、米國に、有名なる一紳士ありき。彼、其の少壯時代に於ては、賤しき煉瓦運搬夫なりき。一日、その成功を、奏するに至りし所以を問はれしとき、「自ら頼みて」と、いとも、簡單に答へき。見よ、彼は、もとより、鉅萬の黃白ありしにあらざり、又、實に、唇齒相扶け、輔車相依るの朋友ともある事なく、願はしき好位置だに得べからざりしを。嗚呼、彼が、名譽の位置に榮進し、世人の尊敬を、享受すべき道は、只、彼自身の畫策と、勞力とに待つの他に依頼すべき者とはなかりき。彼が、此の社會に出て、懷抱せる希望目的としては、僅かに、此の如きに過ぎざりしにも係はらず、自ら頼みて、不撓不屈、堅忍持久、一步は、一步より進みて、遂に、最後の勝利者となるを得たりしなり。

誠に、吾人は、此の如く男らしくして、頼みがひある性格を稱して、自立心とこと云ふなれ。利己の念を離れたる謙讓自重の心は、實に、此の自立心の好同伴なり。「天は自ら助くる者を助く」とは、これ、動すべからざる真理なるを知らずや。

古の英雄豪傑として稱揚せられ、政治家經濟家として贊美せらるゝものには、彼等に隨伴せる一生の興味ある逸話あるは必然なり。もと逸話は其の人物の希望目的品格の善惡意思の強弱等の發現せる眞の心の内部の歴史にして、又、眞の傳記となるものなれば、此の逸話を披見して、彼等人物一生の事業を熟視熟考せば、彼等が、如何に粉骨碎身し、遂に、百難を打破するを得、如何に櫛風沐雨し、幾多落魄の渦中を超脱するを得しか、又、如何に腥風慘悽の巷にはせ、焦頭爛額の暑さに蔽はれ、無数の災害を折衝せしか。逐一上げ來らば、恐らくば、惟日も足らざるべし。然り、而して、これ等を容易に打破し、超脱し、或は又折衝し得るものならむや。然らば其の因りて起る原因は何ぞや。曰く、自立心のみ。曰く、己を頼みて自重せしのみ。眞の勇氣は、皆此の中に萌すなり。

故に、吾人が、健全に、自重自愛、世の障礙と奮闘激戦し、失敗に遭遇するとも、成功を期するの自立心と勇氣とを以て、其の時の遅速と失敗の多少とを問はず、敢然として其の所信に向つて邁進するは、是れ、吾人、百年の畫策にあらずして何ぞ。然るに、市井の無頼、騙詐、僞瞞をこれ事とする徒の多きことより見れば、未だ、彼等は自立自助の念なきものなるか。即ち、彼等は一敗して、直に屈撓し、成功の到底望むべ

からざるを言ひ、或は、過去の失敗は、再び起つての望みなきを言ひ、而して、再起三起、以て奮闘するの勇氣なく、徒に、沮喪挫撓し、遂に此の逆境を抜く能はずして種々の誘惑に陥りし輩か。嗚呼、亦、危険ならずや。

マシユー氏曰く、「人の内部より出づる助力は、常に、人物を強健精勤ならしむれど、外部より來る助力は却て、其の人を薄弱柔情ならしむるものなり。」と、自助的精神の修養に於て、眞に、座右の銘となすに足らむか。

活動の本源は何か

小 倉 誠 一

渺々たる彼の天、漠々たる此の地、覆ふに、日月星辰の燦爛たるあり、載するに、山嶽の峯嶺たるあり、而して萬物、生を此間に稟け、陸に、海に、河に、空に、各其住處を異にすと雖も、吾人々類は、陸上に住し、一片の靈氣豁然として、特に、萬有に卓出するものあり。然り。その靈活なる精神は、智情意の三相を具備し、宏大なる理想と、熱誠とを、包有せり、已に、情慾理想のあるありて、各、其目的を得んと、働きつゝあるなり。即ち、或は、駟馬金鞍を希ひ、或は、峨冠軒冕を望み、或は金殿玉樓美食肥馬を得んと願ふ。而して、是等の得んとし希ふものを、掌に入れんとするには、活動なかるべからず。況んや、一國民にして、國家の干城となり、報國の道を講ぜんとするに於てをや。それ、希望や、理想や、抱負や、即ち、人生の活

動を意味するものにして、社會の進歩發達する所以のもの亦、この活動に基く。而して人生の活動は希望と理想とを追うて、勇往猛進し、一事の成らば更に他の一事を起さんとし、抱負は、益々、大に、忍耐勤勉以て、千苦萬難に堪へ、巍然屹然として終始、一貫その目的に近からんとするにあり、若し、夫れ、人生に希望なくんば、恰も、花もなく、葉もなき、冬林の枯木と等しく、又瀦水の動搖なく、腐敗せるが如くならん。發展なく、振作なき社會は、如何に、寂寞荒涼なるべきか、人生は、實に希望により、其到點を望みて、突進し、電馳し、如何なる勞苦辛酸も、之を忌避嫌厭するなく、百難を排し、萬苦を抑へて、以て、成功の美玉を獲得んことを、期して、進んで止まらざるなり。而して、向上心は、益々、勃興し、縱令成功は、豫想と齟齬を來たし、全く、合節することなくも、精神的無上の快樂と、幸福とは、其行路に於て、自ら享受し得らるゝものなれば、希望は、更に希望を生み、彼の滾々として、長へに盡さざる泉の水を、汲み出すが如き無限なる、無盡なる勇氣は、一層振起し、これに従ひて、活動愈大となり、終に希望の爲めに、身を果たすも敢て悔ひざるなり、古人もいはずや、「死して後止む」と。

人の、斯く、希望に向つて、熱誠ならんには、意志の強固なることを、要するや、彰々乎として、明かなり然れども、櫻花爛漫ならんと欲せば、風雨之を妬み、秋月皎々ならんと欲すれば、浮雲之を蔽ひ、荆棘長じて、桂蘭枯る。自ら求めずして、艱難吾を襲ひ、自ら願はずして、辛酸身を掩ふは、人世の常態なり。されども、失望すべからず、此の艱難こそ、辛酸こそ、抑、亦光あるかな。人この辛酸艱難を嘗むるに非ざれば人世の苦味を解すること能はず、闇黒の一面を、悉知すること能はず、人世の苦味、世態の闇黒を釋するに、あらざれば、その意志を鞏固ならしむること能はず、然り、而して、希望なるもの、發動は、亦無臭味に、

發するものにあらず、偶然に起るものにあらず、必ず或る動機誘掖に、基因するものなり。此、希望の原動力は何物なるか、これ不満足心なり、吾人は、乃ち不満足と、稱するもの、此動機の大部分を、占領しつゝあるを信するなり、一度、この心の起るあらんか、心理作用を以て、忽ち反動的感動は、潰々として、湧出するは、これ人生に於ける自然的情緒にして、その程度、昂進するに従ひ、凜然たる勇氣は、益々、發奮し近くは、白晝帝都街上に國民の血を流さしめたる某國の如く、偉大なる怪力を有するものなり。而して此反動的欲求を、満足せしめんとするには、何等かの手段に依りて、之を外形に、表はざるを得ず、是れ、希望の發生したるものにして、活動の由て、起る所以なり。故に、希望の彼岸に、到達せる時も、不満足心は其影を止めざるべし。斯の如く、不満足心は、希望を生む母にして、希望と不満足心とは、親子の如き、密接の關係を有し、終始相離るべからざる、重大なるものなり。

然り、希望は、不満足心に胚胎し、活動は、希望に因りて起る、かくて社會は、向上發達を來たすに、至るものなるを以て、不満足心は、實に、進取的氣象を標榜し、文明的理想を、發現するものなり。然るに、世動もすれば、不満足心を以て、人世の精神的、大病根視し、これを排除し、これを擯斥せんとする者あり、這は、恰も、希望を棄て、活動を斥くるものなれば、是等のものこそ、却て、人生の進歩的希望を阻碍するものにして、社會の發達を、阻害するものと、謂はざるを得ず。何となれば、人生にして、不満足心なからんか、希望起らず、活動生ぜず、社會の衰運は、自ら免かるべからざればなり。

抑も、不満足心は大に歡迎せざるべからず、年少、氣鋭の士は、須らく、殊に、大不満足心を有し、最も雄大なる希望を以て、爽快活潑の氣象を鼓舞すべし、されど、薄志弱行の輩にありては、徒らに、獲取すべか

らざる富貴を、追慕し、知得すべからざる眞理を、渴仰し、到達すべからざる官爵を羨望し、碌々として、懊惱煩悶し、失望し、落膽し、慨歎し、人を恨み、世を恨み、終に、自暴自棄の深淵に沈み、腐敗墮落するものなしとせず、是れ、實に、意思の鍛鍊足らざるの致す所にして、其鬱憤の念の如きの徒は、眞個の人間として、殆んど價值なく、婦女的、小不満足心に、劣るといはざるべからず。畢竟、其不平の力に、伴ふべき意志の力を養成し、蓄積することを必要となすのみ、吾人は、飽くまで、不満足心の多からんことを望み、且つ之を尊重して、止まざるものなり、蓋しこれ不満足心と、希望とは相關聯して活動を生ずるものなればなり。噫、不満足心は、人生活動の本源なり。

平和の戦争

原 田 正 三

日露戦争の結果、我國威は萬邦に輝き、前途の好望洋々として春海を眺むるが如し。我國民は此に於て大に安じて可なるか。曰く、否、戦争の成果を收むると否とは今後我等國民の努力に在り。干戈の戦争は既に終れり。然れども平和の戦争は益々これより劇しからんとす。干戈の戦期は短なるも、平和の戦期は未來永劫に絶ゆることなし。

平和の戦争とは何ぞ。他無し。外國と農、工、商業の戦争之なり。我國は武力に於ては既に勝てり。然れども平和の戦争に於ては果して如何。

今我國の農工商業を以て、之を歐米先進國のそれに比せんか、彼我優劣の度、固より同日の談にあらざるなり。我等國民たるもの「勝て兜の緒をしめよ」の諺に従ひ、戰勝に安ずることなく、極力、意を平和の戰爭に注ぎ、國を富まし、以て戰勝の成果を收め、金匱無缺の國體をして益々、發達増進せしめん事を期せざる可らず。



雜 錄



忘 餘 錄

藤 井 百 輔

余は、生れ得て慵懶、平生多く書を読まず。時に、之を読むも、記性頗鈍く、随つて讀めば、随つて忘る。故を以て、見る所の、異日の參考に資すべきものあるときは、之を鈔録せざるを得ず。平生、甚其煩を患ふれども、之を如何ともすること能はざるなり。「塵も積れば山を做す」の喩に漏れず、折節に鈔録せる所のもの、此頃、漸、篋底に、堆をなすに至れるを以て、一日、之を整理せむと欲し、類を分ちて連続す。たまたま五雜組中の數節を鈔録せるものを得たり。其中に、次の一節あるを見たり。

病忘者、行則忘止、臥則忘起、其妻患之曰、艾子滑稽多智、能愈膏盲之疾、盍往師之、其人曰是、

雜 錄

乘馬狹弓矢而行、未一舍内逼、下馬而便、矢植于土、馬繫于樹、便訖、左顧觀其矢曰、危哉、流矢奚自、幾乎中予、右顧而觀其馬、喜曰、雖受虛驚、乃得一馬、引轡將旋、忽自踐其所遺糞、頓足曰、踏却犬糞汚吾履、惜哉、鞭馬反向歸路而行、須臾抵家、徘徊門外曰、此何人居、豈艾子所寓邪、其妻適見之、知又忘罵之、其人悵然曰、孃子素非舊識、何故出語傷人、

余覺えず失笑して曰く、人の、忘を病むもの、恐らくは之より甚しきものなからむ。古に在りて、唯、「宋陽里華子中年病忘朝取而夕忘夕與而朝忘在塗則忘行在室則忘坐」と云へるもの、之に幾しとす。余の善く忘るゝも、未、此の如きの甚しきに至らじ。之を思へば、尙、聊、自強うするに足るものあり。意ふに、此人といへども、決して、食を忘れたること無かるべく、寢を忘れたること無かるべく、自己を愛することを忘れたることなかるべし。況や、此人より優れるものに於てをや。さらば、之を、古の嗜欲に従ひて其身を忘れたるものに視ぶれば、尙、遙に勝れる所ありといふを得ざらむや。然れども、要

するに是を以て、自足れりとなすべからざるなり。今の世、若、艾子の如きものありて、善く、余か忘を醫するに足るといはく、余は、當さに、千里の遠きをも辭せずして、往きて、之に師事すべきなり。吁嗟、若、余か忘をして、夷齊が、舊惡を忘れ、孔子が、樂んで、憂を忘れ、憤を發して、食を忘れたりし忘と一般ならしめむか、余も、また、一個の好人たるを失はざるべし。雷に、之を醫すべき必要を見ざるのみならず、當に、ますま之を養長すべきなり。然れども、悲い哉、其類にあらざるなり。世の、忘を病むと稱するもの、其人少からず、未、其何の忘に屬するかを知らざるのみ。以下の數條、亦皆、同時に鈔録せるものに係る。事、其類を同じくせずといへども、序なれば、録して學生諸子が解頤の料に供せむと欲す。

閩林志、避雨寓染坊、得其染帳、漫閱之、匆匆而去、越二日、其家回祿、索帳者、紛然莫知爲計、林復過之曰、我能記之、取筆疾錄、不爽一字、此天生之資、非強記可到者、嘉禾周鼎、讀百韻詩、一遍即誦、又能從未倒誦、亦絕世之資矣、而功名

西傳説の偶合、奇といふべし。

相傳、海上有駕舟入魚腹者、舟中人曰、天色何陡暗也、取炬然之、火熱而魚驚、遂吞而入水、是則然矣、然舟人之言、與其取炬也、孰聞而孰見之、本草曰、獨活有風不動、無風自搖、石髓入水却乾、出水則濕、出水濕誠有之矣、入水即乾、何從得知也、言固有習聞、而不覺其害於理者、可爲一笑、今昔物語に、舟游する者、大魚に吞まれたるに、魚腹中暗黒なること夜の如くなりきと云ひたりと云へる傳説を擧げて一舟、皆、魚腹に入る、誰か、其狀を世に傳ふるを得たる。妄といふべしと云へり。是、亦、傳説の偶合にして而も、遙に、謝肇淛以前に在り。此類の笑柄、各國にこれあり、奇なるかな。今人、冬至多用書雲事、左傳、春王正月日南至、公既視朔、遂登觀臺以望而書禮也、按周禮、保章氏以五雲之物、辨吉凶水旱豐荒之稜、註、二至二分觀雲氣、青爲蜃、白爲雉、赤爲兵荒、黑爲水、黃爲豊、則不獨冬至也、但雲氣倏變、一歲四占、倘吉凶互異、當何適從耶、邦俗、立春の日、ウン音を帯ふるもの、遺根、人參

不顯、蓋似有別才也、

其強記、前條記する所と、正に相反せり。而して、謝肇淛、蓋、別才あるに似たりと云ふ。吾人のために辯護する者に似たり。此の郷の先哲復軒山田原欽亦、頗強記なりき。今に至るまで、人、其、雨を、染坊に避け、帳簿を閲せし事を傳ふ。全く、林か事と相同じ。又之を以て、羅山林忠の事となすものあり。復軒といひ羅山といひ、いづれも強記の人なりしは云ふまでもなし。されど、其行事の、かくまで暗合せしと云ふは、疑なきこと能はざるなり。特に林志と林忠と、其姓を同じくせるは、更に奇なり。何の世にか、好事者が林志の事を假りて傳會したるものなるべし。傳説中、此類のもの、往々にして之あり。

韋阜鎮成都、有柑大如斗、欲以進、醫者各殷在座、固持不可、請以針刺其蒂、流血霑席、駭而剖之乃兩頭蛇也、可不戒哉、著聞集に載する所の、丹波忠明が、針を以て瓜中の蛇を刺し、事と相類する。著聞集の著、五雜組前に在り。附會にあらざること、論を須たず。東

銀杏の類を聚めて、之を食ふときは、一歳中の災疫を禳ふとの説を傳ふ。其何に原づけるかを知ると能はざりしが、此の文を讀むに恐らくは、亦西土此等の陋説に出でしならむか。

俗皆以十二月二十四日記竈、謂竈神是夜上天、以一家所行善惡奏於天也、至是日、婦人女子多持齋茹素、無論男婦皆然、問其故、曰、昨夜、竈神所奏善惡、今日、天曹遣所由覆覈耳、余笑謂、古人媚竈之意、不過如此、然不修行於平日、而持素於一日、竈可欺乎、天可欺乎、今閩人以好直言無隱者、俗猶呼曰竈公也

今俗語、窰器謂之磁器者、盖河南磁州窰最多、故相沿名之、如銀稱朱提、墨稱隴麈之類也、此に據るときは、猶本邦、瀬戸の陶器最著れたるを以て遂に、陶器を稱して瀬戸物と爲すに至れるが如きのみ。今、陶磁を別ちて兩種となす者あるが如き

は、其甚謂れなきを見る。

論衡曰、畫工圖雷公、狀如連鼓形、一人椎之、可見漢時相傳若此、然雷之形、人常有見之者、大約似雌雞、肉翅、其響乃兩翅奮撲而作聲也、宋儒以陰陽之理解釋雷電、此誠可笑、夫既有形有聲、春而起、秋而蟄、其爲物類審矣、

浮世畫師、雷公を圖するに、常に、鬼形のものあり連鼓を負ひ、兩手に、杓を持し、之を撃つ。最、奇想に屬す。今此文を讀むに、漢時、既、此圖あり。其傳來、竝に遠きを知る。

謝肇淪の言、時に、奇警喜ぶべきものあり。然れども、其迂愚なるものに至りては、人をして噴飯せしむ。此條に、雷を、物類なりといへるが如き、即、其一なり。事の序なれば、次の一條を擧げて、其奇說を紹介せむ。

福清石竺山多猴、千百爲群、戚少保繼先勦倭時、屯兵於此、每教軍士放火器、狙窺而習之、乃命軍士捕數百、善養之、仍令習火器以爲常、比賊至、伏兵山谷中、而令羣狙闖其營、賊不虞也、少頃、火器俱發、霹靂震地、賊大驚駭、伏發殲焉、昔鐵

尹燧象、田單火牛、江道火雞、今戚公乃以火狙、智者相師大約類此、

狙軍、倭寇を破る、眞に、護國の大勳といふべく而して、戚少保天來の奇計は前古に、儔なし。此に準じて進まば、後世、或は、土龍隊を編成して、塹壕を穿たしめ、河童軍を組織して水雷艇を御せしむるに至らむも測るべからざるなり、懼るべきかな。惜むらくは、此の如き神機妙算に富むもの多きにも係らず、其四邊、常に、敵國の侵略を被ること。

講餘漫錄

安藤 靜處

十九綱渡の喩

「左に倚るな。右に倚るな。」と、うるさきまでに、禁規を加ふるは、幅の廣き道路を、一直線に進ましめむが爲なり。廣き道路は、進み方、少し曲りても自己は、それを知らず。故に、禁戒規制を受けずして氣儘に進むときは、進線曲らざるを保しがたし。然れども、常人の常情、ことに、經驗猶乏しき人の癖として、他の掣肘を受くることを欲せざるをいか

にかせむ。よししばらく忍びて、その禁規を受けよ、人々。汝は、不日、汝の足のはらより狭き綱の上を獨身にて渡りゆく運機に達せむ。その時にいたらば一本の杖も、一人の掣肘も、受けんとしても、もはや得べからざることあらむ。

二十片假名と平假名

片假名、平假名の読み書きの難易に關し、元良、松本兩博士の實驗せられたる結果の報告書の要領を摘まむに、まづ、被験者十一人に就きて、假名全體の書記時間を計るに、縦書にては、片假名の方はやく横書にても、また同じ。さて、平假名の方に就きていへば、縦書の方はやく、片假名にては、横書の方はやく、また、平假名の縦書よりも、片假名横書の方が、一層早きを見認めたり。次に、一字を書く時間の平均は、平假名の方おそく、且、半秒以下にて書き得る字が、片假名に多く、同時間にて書き得る字も、片假名の方に多きを見認めたり。次に、讀方の實驗につきては、文字を無意義に結合したるもの十類を作り、被験者十一人に讀ましむるに、一定時間によみたる字數は、縦にても、横にても、片假名

の方多けれども、字形類似の爲に混讀せることも、片假名に多く、また一定時間に、平假名は横讀が字數多くよまれ、片假名は、縦讀が、多くよまれ、また、縦讀も横讀も、片假名が、多く正しく讀まれ、混讀は平假名の方、縦横ともに、同數なるも、片假名の方にては、縦讀に多きを見認めたり。約言すれば、一定大の假名を書くには、片假名の方、最早く一定時間に假名をよむには、片假名の方、遙に多しと斷定せられたるなり。

廿一源義朝の最後

源義朝最後の事を、愚管抄には、次のごとく記せり曰はく、「義朝ハ、又、馬ニモ、エノラズ、徒ハダシニテ、尾張國マデ落テ行キテ、足モハレ疲レタレバ郎等鎌田次郎正清ガ舅ニテ、内海莊司忠致トテ、大矢ノ左衛門ムネツチガ末孫ト云者ノ有ケル家ニウチタノミテ、カカルユカリナレバ、行キツケル。待チ悦ブ由ニテ、イミジクイタハリツ、湯ワカシテアブサムトシケルニ、正清、事ノケシキヲカサトリテ、ココニテウタレナンズヨト見テケレバ、「カナイ候ハジ、アシク候。」ト云ヒケレバ、「サウナシ、皆存

タリ。此頭打テヨ。ト云ヒケレバ、正清、主ノ頭打落シテ、ヤガテ我身自害シテケリ。」

(廿二) 教訓の意ありげなる狂句

柔らかくかたく持ちたし人ごころ 六代 川柳
笑はれるたびにるなかの垢がとれ 白人
天井へつかへてまがる影ぼうし 何の屋
鳥居にも笠木土見ぬ御神教 内子
堪忍の袋のひもをうててくみ 永二
入つ口に慾のこぼるゝ栗ひろひ 春塘
絞るほどてるからしほれ智恵袋
言ひわけがくらくいと顔に火がともり
賣するとから様でかく三代目
神ほとけ御無沙汰申すほどな無事
米つきをするとは見えぬ春の水
高みから見るとまがつた道は知れ
押しのおき異見あたさま上げられず
金たまる頃に麥めしうまくなり
錦さる山ははたかになるした地
鼻のさきあぶない智恵のおき處

(廿三) 書物の威靈

書籍中の事からは、必しも、始より、我を教訓するに足るべき完全の力あるにあらず。我これを咀嚼して、その言外に、一の道理を考へ出して、その理を補ひつゝ、一見解を下すによりて、書中の言言句句始めて、威靈あるなり。人、もし、この心をもて、書をよまば、野乘稗史、皆、以て、師とすべし。唯それ、未、書に、威靈を生ぜしむること能はずしてその書を持て立てる、教壇上の人のみに威嚴あるを覺ゆる時代は、目の毒、心の毒となる書籍、世に、猶多しと知るべし。語を寄す。好學の人、早く、佛を讀して、佛を呵する底の域に進みて、天下の至樂たる讀書の益を、廣く、厚く、且、長久に享受せよ。

(廿四) 人名の訓方

藤原冬嗣(フユツギ) 伴健岑(コホミチ) 橋逸勢(トウナリ) 藤原道兼(ミチカヌ) 右愚管抄 菅野眞道(マナミ) 藤原長良(ナガラ) 源定(サダ) 春澄善繩(ヨシタ) 藤原義懷(ヨシチカ) 藤原佐理(スケタカ) 藤原齊信(タダノブ) 大江朝綱(アサツナ) 紀齊名(タダナ) 右諱訓抄 菅原道眞(ミチマサ) 右拾遺抄

(廿五) 赤穂義士の逸事

播州赤穂の士大石良雄等の逸話多きは、人の知る所なるが、このごろ、舊長藩士世良利貞が、同藩の近藤晋一郎に遣はしたる書状を見たるに、良雄に關することあれば、珍しきまゝに、寫し置きたり。今、これを左に掲ぐ。晋一郎は即、芳樹翁の事なり。

一 岩瀬百樹(一に涼仙といふ)と申すは山東菴京傳と申す戯作者の弟に候邦憲公側室綾園(今薙髮して榮樹院と號す孝姫様の御實母なり)の父にて候當年八拾四歳耳目健に御座候て讀書を好み歌をよみ先江戸にては高名の者にて御座候先日此者に相對仕候節

一 義士ども上野助の首を泉岳寺にて手向候已後この首はもはや入用これなく吉良殿に渡し給はれと泉岳寺へ申候へども僧等いなみ候て受引申さず達て義士中の内より持參候様に申候につき義士いはくこの人數は皆吉良家の怨敵なるに首級を持參致し候はゞ安穩にはあるべからず尤只今本望を遂げ候上は命惜しきことは更になしといへども然れども我々は公儀よりの御仕置を待ち候身柄ゆゑ吉良殿

の家來と今更戦びて死せん事は好まらず是非に寺より持參候様にと申けれども孰れとも恐れて請引く者これなく候處阿波より來り居候小僧十六歳(一説十九歳)なるもの末座より進み出で各のたまふ事あり吾らにても宜しく候はゞ持參仕るべしとて直に吉良家へ持參して則ち首受取の一書を取りて歸り候と申す事これも百樹話にて慥に聞き候事の一よし老人の事ゆゑ箇様の話も聞居申すべく候一 義士ども其々御預と相成り既に引分れ候節内藏助竊に主税を片陰に招き何かさゝやき候由その後主税と一所に御預と相成り居候義士ども主税に申候は凡此度の一擧四十余人志を同うして本意を遂げ互に内外なく申合せたる事なるに只今内藏助殿何か貴殿ばかりにさゝやき給ひしは恠しき事なりかやうに死生を一同に誓ひ候上は何卒聞かせ給へかしと再應申候へども主税更に明し申さざる由しかる處切腹にきまりし後又々義士どもより箇様に極り一日の命に罷成候上は今は何をか隠し給へるぞ必打明けてのたまへかし是ばかり黄金の障りなりと申候は其時主税申候は内藏助われらにさゝやき

候事御不審は尤なり是は内藏助申候様は此度の件公儀より御仕置仰付られ候は必定なりといへども萬一も命を御助あらば我と汝兩人は必切腹すべし御助命の沙汰あるとも必々ながらへ申すべきにはあらずと堅くいひぬ此事にて候と申候由右等いづれも百樹が話にて候

廿六いざよふ月

いざよふ月とは、入りかた近けれども、いまだ入らで、しばしある程の月をいひ、又、出でんとして、しばし出でざるをいふ。「いざよふ」は猶豫の意なり。故に、いざよふ月、また、いざよひの月とは、出づる方にては、十六夜月をいへど、入るかたには十五夜の月にもいふなり。源氏物語夕顔の巻に、八月十五夜の事をいひて、「曉近くなりけるなるべし」とかき、さて、下に、「いざよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ」とかき、又、阿佛尼の日記に、「ゆくりなく、いざよふ月にさそはれて出でなむとぞ思ひなりぬる。」とありて、そのさきに、「日くれかゝりて」といひ、その下に、「けふは、十六日の夜なりけり。」また、都を出てしは、

「神無月十六日なりしかば、いざよふ月をおほしめしわすれざりけるにや。」とあり。又、吉野拾遺、後醍醐帝崩御の條に、「同じ八日の初頃より、中略、同十五日のいざよひの月と共に、雲かくれさせ給ひけるに」とかけり。これらの「いざよふ」は、皆、十五夜の月の入り方のことにいへるものなること、前後の文にて、よく知らる。さるを、右の文などを解する人々、多く、十六日の夜の月の出づる方につきて、種々、牽強の言をなすものなり。その人に就きて質義研究したし。

游言録

岩田 萩 崖

●分業は文明の一徴象なり、泥棒は泥棒、紳士は紳士、學生は學生、女子は女子ならざるべからず、此等の範圍、仕事柄の混淆し、判然せぬのは、野蠻の證據なり、而して日本の現状は如何、慶すべきか、弔すべきか

●現今は一般にリイズニング發達したるが故に、過去程豪傑が出てざるなり、とは眞ならざるか

れ千古に亘るべきなり

●醫術の目的は治療にあり、金の儲かるは、其の自然の結果なり、學問の目的は眞理の闡明に在り、立身出世は、其の自然の結果なり、然るに金儲のためは醫業を營み、立身出世を望んで學問をなす、故に惡魔と猫の多き世となるなり

●梅、椿、櫻の最後を比較研究せば、興味少なからざるべし

●有名なる歴史家ニールブル曰く、亡國は常に自殺的なり、と外襲の腐蝕は防ぎ易し、内より醸せる墮落は止め難し、憂國の士戒心すべし

●思考の標準を眞と言ひ、意志行動の規矩を善と言ひ、愛情の示現を美と言ふ、要するに眞善美は一なり、而して時間空間の裁判により、始めて眞善美の眞價値が見得らるものなり

●下等動物になるほど、雌が有意味にして、雄が無意味なり、近來廂髮次第に出酒張りて、男性に迫り來る、是れ社會退化の徴、見よ、提摩太前書に教あり、われ婦女教を施すことと、男の上に權を執ることとを許さず、婦女は只安靜にすべし、蓋はアダムは前に造られ、エバは後に造られたればなり、と是

●番山先生曰く、雲のかゝるは月のため、風の散らすは花のため、雲と風とのありてこそ、月と花とはたふとけれど、此哲理さへ辨へば、後悔も、怨恨もなく、樂天にして、向上が出来るなり

●黒奴は黒色を美とす、黒粉を粧用す、故に色黒き何嬢といふは、大なる美稱なり、或は黄色を美とするマレイ人あり、或はオリブ、或は海老茶、觀來れば際なし、要するに、美は空なり虚なり、と悟るべし

●チャールズ、カロール、は無鐵砲にも（黒奴は獸類なり）の書を著す、曰く、聖書に神は己の姿に像りてアダム、イブを造れりとあり、兩人は白人種なり黒奴はこれと同系統のものならず、神が別に造りしものにして、獸類の一種なり、到底白人種の奴隷たらざるべからず、と其我利々々加減驚くに餘りあり、しかも此著書の大に歡迎されつゝあるとは、黒色の人種は用心が大切なり

●問へば曰く、書生時代が最も快なりと、恐らくは吾人間には一の眞理と認められをらん、然し是れ無

責任なる證表なることを知れ

●學は才を以て靈に、識は才を以て通ず、想は才を以て活き、事は才を以て理し、文は才を以て美に、話は才を以て妙なり、とは言はれざる歟

●醜き人は如何に着飾らんとも、其醜さを蔽ふ能はざるが如く、美しき人は如何に着飾らざるも其の美しきを害せざるものなり、とは透徹せる眞理なり、故にかの、馬子にも衣裳と言ふとは淺薄なる見解なり

●十歳の小兒は曰く、御父サンは大學者なりと、十五歳となれば曰く、我位と、二十歳となれば、二倍の智識ありと、三十歳となれば、其氣付に傾聽し、四十歳となれば、到底及ばざるものありと、五十歳にして、父の忠言を求め、六十歳となり父の死に當つては、世界中最賢明なるものは父なり、と考ふるものなり、問ふ、何の事乎

●形式を主とし、實質を客とするもの、當今多く然り、此輩は畫餅を觀て滿腹し得る大詩人大哲人といふべきもの、現社會は誠に尊きと哉

●ショーペンハウエル思へらく、丈低く、肩狭く、

大差なし、眞の倭軀は亞弗利加アツカ人種なり、徒に人眞似すると、かゝる馬鹿の骨頂に上るとあり

●お宮の錢婚は、有爲の青年間貫一を驅つて惡魔たらしめ、玲瓏透徹の頭腦をもてる、君江嬢の榮耀熱は、大不倫を敢てせしむ、金錢崇拜程、不倫理不經濟なるものはなし、加之も此不可解物に、吾人死命を制せられざるを得ざる社會とは、噫理想に遠きとなる哉

●安樂を貪らんとて、自墮落不勉強たり、而して自墮落不勉強は安樂を産まず、えらからんがために威張る、而して威張るとは人が偉くならぬ證據なり此等の矛盾が解らぬ間は、世は闇なり、神の攝理の尊きを味ひ能はざるもの多きは、寒心なり

●亞弗利加サアラ族の黑人種は、男女大低六尺九寸内外にして、六尺六寸以上ならざれば、兵役に合格せず、脚力は非常に強きも、鬪争には弱く、根氣極めて乏し、とのと、ウドの太木は理想ならず、要は元氣なり、趣味なり、人格なり、徒に小なるを悲しむと勿れ

●舌の人に於ける、梶の舟に於ける、轡の馬に於ける

腰潤く、足短き、女性を美なりといふ者は、唯性慾のために、曇らされたる男子の智性のみ、この性慾に於て、女性の美の一切は存在せり、と苟も女性の眞美を理解せんとするものは、性慾より超脱して、初てこれを得るものぞかし

●人は社交的動物なり、とのとは何人も争はず、果して然らば、人は恰も日光の如く、其接するに當つては、丁度植物に向日の態を引起すが如く、一種の親しむべき生爽と暖和とを感せしめざるべからず、氷の如く、鐵の如く、木の如く、石の如き人は、既に人間としての第一意義を缺ける、一種の假裝人間ののみ

●女性の美と、男性の愛とは、異種のものならず同一事實なり、美は愛といへる心的要求の放射物、流出物なり、愛の及ぶ對象にあらずして、愛當物なりと、オットー、ワイニンは解釋す、これ痘痕が歴と見ゆる眞理をいへるものか

●西洋人がエスキモー人を、小なりと言下するを聞きて、國人迄がこの眞似するは抱腹絶倒、牡蠣が鼻垂を笑ふと一般なり、エスキモー人は吾人の身長とる、小なりと雖も其効力や強大なり、然し大切なりとて餘りに藏ひ込めば、腐蝕して用をなさぬに到る虞あり

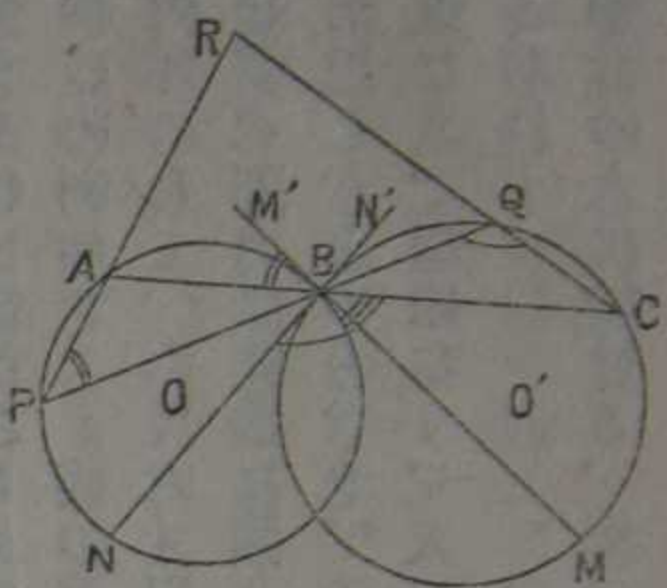
●グラッドストーン曾て田舎の一老婆に向ひ、愛蘭土自治案に關する主張を述べ、堂々國會に於ける時と異なるなかりしと、これ彼の偉大にして成功せし所なり、眞理の前には卑賤賢愚なし、其確信を披瀝するには、常に全力を振はざるべからず、此用意ありてこそ始めて成功の曙光に會ふを得べし、放慢なるべからず

菊地大麓氏著初等幾何學教科書平面部第二編の問題152の解

藤原甚吉

二つの圓周の出會ふ點Bを過り、直線ABCを引き、圓周とA及Cに於て出會はしむ。又B點を過り、任意の直線を引き、圓周と再びP及Qに於て出會はしむ。A.P.C.Oの交點Rの軌跡は或圓弧なり。(本題の軌跡は圓弧にあらずして或圓周なり)

(解)、與へられたる二つの圓をO及O'としBを過りO及O'の兩圓に切線BC及B'C'を引き、O'及O圓と



交る點を夫々M及Nとす。
 倍て、Qが弧BQC上に在る
 間は、Pは弧NPA上に在
 り。△RPQに於て、 $\angle PRQ =$
 $\angle PQC - \angle RPQ$ 即ち $\angle ARO = \angle BQC$
 $- \angle APB$ 然るに
 $\angle BQC = \angle NBC$ (切線と其切點

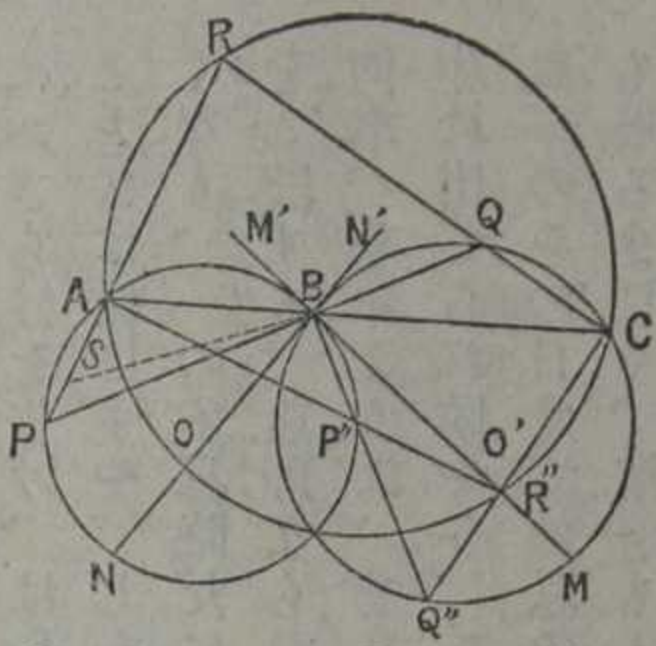
を過る弦となす角)

又 $\angle APB = \angle M'BA$ (切線と弦とのなす角) = $\angle CBM$ (對頂角)

仍て $\angle ARO = \angle NBC - \angle CBM = \angle NBM$. 即ち $\angle ARC$ は B 點より兩圓へ引ける切線のなす角に等しきを以て常に一定なり。

Qが弧CQM上の任意の位置例へば、Qに在るとすれば、Pは弧APB上の一點にP'に來り、AP'CQ'の交點をR'とすれば、 $\angle ARC' = \angle AP'B - \angle BQ'C$ なるを以て前と同様に、 $\angle ARC' = \angle NBM'$ なることを證明し得。之れによりてQが弧BCM上の任意の位置に在るときは、Pは弧NAB上

を引くとも)AP, CQの交點Rは常にACを弦とする一定の圓周上に在り。

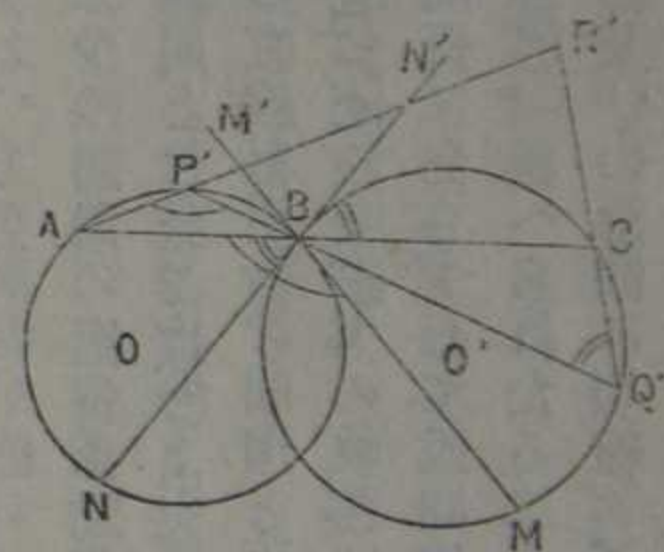


次に、此圓周上の任意の點例へばRを取り、RA, RCを結び付け、RA及RCがO及O'圓と再び交る點を、夫々P及Qとすれば、PBQは同一直線上に在り。何となればPB及QBを結び付け、又QBを延長して、RAと交る

點をSとすれば、 $\triangle RSQ$ に於て $\angle ASB = \angle BQC - \angle ARC$
 $= \angle NBC - \angle NBM = \angle MBC$
 又 $\angle APB = \angle M'BA = \angle MBC$ 故に $\angle ASB = \angle APB$

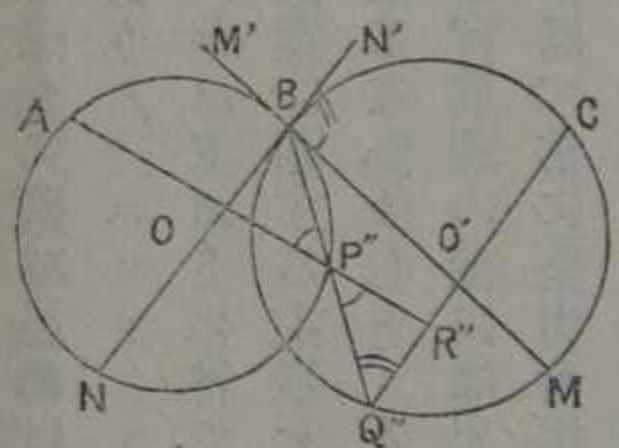
故にPとSとは相一致せざるべからず。仍てPBQは同一直線上に在り。故に此圓周上の點は、何れも皆與へられたる性質を有す。故に此圓周がAP, CQの交點Rの軌跡なり。

注意ACを弦とする圓周上の任意の點とし、Rを弧ARC上に取りたるも、弧AR'C上に取りたるも、同様



に在りてAP, CQの交點Rは有限直線ACの同側に在りて、ACが常に一定の角即ちBMに對する様なる點なり。Qが弧MQ'B上に在る間はPは弧BP'N上に在り、AP'NQC'の交點をR'とす

ば、 $\angle AR'C' = \angle BQ'C' + \angle Q'P'R'$ 然るに $\angle BQ'C' = \angle N'BC'$ (切線と弦となす角) $\angle Q'P'R' = \angle AP'B = \angle M'BA = \angle CBM$ 故に $\angle AR'C' = \angle N'BC' + \angle CBM = \angle N'BM$



即ちQが弧MQ'B上に在るとせば、AP'NQC'の交點はACの前と反對の側に在りて、ACが常に一定角即ちBMに對する様なる點なり。而して $\angle NBM + \angle N'BM = 2$ 直角なるを以て、QがO'圓周の何れの位置に在るも(即ちBを過り任意に直線PBQ

に證明することを得べし。又Rを弧ARC上に取りたる時は、 $\angle PBAQB$ はACの反對の側に在り。而して弧AR'C上に取りたる時は、 $\angle PBAQB$ はACの同じ側に在ることは、A及Cを過り、O及O'圓に切線を引き、容易に證明することを得。

思ひ出放題

田原四郎

○句讀 句讀は、兎角忽にし勝のものである。爲に容易ならぬ失敗も、損害も、滑稽も演ぜらるゝ次第にて、「咽がなるはや死にかゝる鬼がまつ」とやら「悲しやくやしや傳兵衛が冥途へ宿がへ仕候」など、とつけない大間違もあれば、辨慶が何とかもある先頃、米國の新聞紙にも、活版の誤植で、次の如き事實があつたとのことだ。

“At this moment the famous statesman entered no his head, a large and well brushed silk hat on his feet, broad, flat-heeled shoes upon his back, a well-pressed over coat with a velvet collar upon his features, a calm smile of content.”

いふまでもなく、この文中、コンマのあるべきは entered, hat, shoes, collar の後なるが、このために「此の時しも、有名な政治家は、足に高帽をつけ、脊に靴をはき、顔に天鵞絨のカラーをつけたる外套を著て、頭て歩いてはいつて來た。」といふ様な滑稽に歸したとのことである。

○遺言 運動會氏の遺言狀に曰く、
短命としいへば、陽炎をこそ例には引け、こゝに猶適切なる一新例を御披露いたし候。そは私自身の運命に候。朝の烟火と共に生れ。夕の萬歳聲裡におさらばを告げ、はや冥途へ旅立とは、悲しきことには候はずや。しかも、その間、赤くなり青くなり、一の安息時だになき悪生涯。あゝと愚痴をこぼすも、無理ならぬ事と御諒察下されたく候何卒、來年よりは、せめて一ヶ月位前からなりと生れ出でられ候やう、お心をかけられ度候。晴の舞臺のその目までの私の天地は、無理に運動場にも限るまじく、濱邊もよし、御歸りの途にも適當の處これあるべしと存候。かへすがへすも蜉蝣の身の一日の命だけは、御免を蒙り度、今や三途に

急ぐはかなき身の、まして、やんやとさわぎたてられ候まゝ、ほんの一はしを吐露致しおき候草々
○庭球 運動として、女々しい様な嫌はあれど、怪我なしの安全なるは、これに如くものはあるまい、宜しくやるべしである。がしかし、又、これほど人の價値を觀易い、又、觀られ易いものも他にはあるまい。萬死に一生を得る膽力も、遠かの場合に於ける智の活用も、鋭敏も遅鈍も、懸命の場合の處置も禮あるも正直なるも、遊び太郎も、皆人格を判ずる種となるから、苟くも、呑氣に構へてはならぬ。

心のまゝに

岡藤 汀舟

○われわが目を食ふ
△西洋料理法を教ふる人いふ。シチューの汁は白色にてはうまからずとて、態と色をつけ用ふるは、我が目を食ふが如しと。われ校友會雜誌に投書すれども、面白からずとて人よろこばず。只われ一人、讀みては悦ぶ。われ、我が目を食ふかと一人をかし。
○燕雀いづくんど

△漢學先生あり。常に俗客をうるさがりて留守をつかふ。新參の下婢その心を知らずして名刺を取り次ぎたるに、先生怒ること甚し。下婢は、負債多き家なりと見とめて急に暇を乞ひ去りぬ。先生はじめて悟り、「あゝ燕雀いづくんど」とや呻きけむ。

○裸體の人物

△ある畫師いふ。裸體の人物を畫くに足が一番大事なりと。顔は勿論なれば、よく出來れば、人もほめてその功あらはるゝに、足はよしとて賞められず悪しくては笑はるゝむつかしさを謂ふなるべし。歌にも文にもこの足の如き難所あり。役者の藝にも之あらむ。教育家の教授にも之あらむ。政治家の術にも之あらむ。

○栗

△殘暑々々とはいへど夕風すゞしきは秋のしるしなるべし。燈火身にしむ好時節とはなりぬ。軒に音して落つるを見れば栗なり。焼かれむ恐れもまだなければ、人さゝむ悪心もまだもたじ。

○天か人か

△千丈の斷崖を心のまゝに、下りのほる獅子も、檻

に籠められては猫にもしからず。萬里の虚空をわがものがほに歌ひ遊ぶ雲雀も、籠にとらはれては雀にもおとれり。

○後世の歌人

三日月を弓張といひ、満月を鏡にたとへしは、弓を常にならし、丸き鏡を人々の用ひし時の言葉なり。花を雲に見なし、紅葉を錦にまがふるは古今の別なけれど、あまりいひなれて、既に讀者を感ぜしむる能はず、新ならむとすれば奇におちいり、穩ならむとすれば言ひふるしたる言となれるを如何せむ。後世の歌人こそいとかたけれ。

○正誤取消

著者の氣がすむのみにて讀者に功なきは、本の終りの正誤。出でたるために却りて評判のひろまるは新聞の取消。

○手習の師

手習の師あり。弟子に告げて曰く。筆は何屋の何々用筆ならざるべからずと。その毛を選ぶこといとやかまし。かゝる教を受けたる人は必ず曰はむ。宿屋

の坊主筆は我師の流儀ならず。宿帳はつけがたし。郵便局のさきなし筆は我手本の品ならねば、端書もかかれずと。かゝるたぐひを普通教育と心得る人やありなむ。

○雲のゆくへ

わが友神代君、廣島にありて入院されし報來りぬ。一夕、つれづれなるまゝ歌などかきつけて、君が病床の慰みとせんとて送る。そのうちに

雲のゆくへひとりながめて友を眩さぬ

小雨そぼふる窓のあはれに。

その後かへし來りぬ。

あの雲は友がふるさと今過ぎむと

ながむるわれを今友は泣くや。

○離別

ひと夜、「萩のや遺稿」を見ゆくうちに

君が船を磯べに立ちて見てあれば

袴のすそに浪のよせ來ぬ。

とふ歌うしてとや

君が影の遠く磯べに消えてのち

はじめて知りぬ濡れし袂ぞ。

Young woman splendidly dressed, but too showily for a lady, who were both in jimikishas.

Please understand that all the roads in Otarru are not so well cared for by the authorities, that they become muddy immediately when it rains. That night it was quite troublesome for men and carriages to get along, for it had rained for the preceding three days. It was particularly the case in the evening, when a little snow was falling from the dark ghastly sky, and the young man, in this cold lonely night, with bare feet noticed this fine couple who were very hatefully scolding and urging their tardy jimikishamen. They had indeed an uneasy time and a hard struggle of it, and were all wet with sweat, which streamed on their faces as thick as the rain; but they could not satisfy these heartless passengers. The young man who had been earnestly viewing the scene could restrain himself no longer and helped the jimikishamen out of the difficulty, one after the other.



THE TRUE GENTLEMAN.

By Hakuzo Iwata.

At Otarru in Hokkaido, there lived five years ago a worthy young man, whose name, I am sorry, slipped my memory. He was a most poor helpless orphan, and yet he had some great ambition and ardently desired to study. As he was, in the daytime, very busy in earning his daily bread as a distributor of milk and newspaper, or as an apple-vendor, he was obliged to devote himself, as he pleased, to the study of Russian only at night.

Once late at night when he was coming home from his teacher's house he met a fur-coated gentleman with a grand looking mustache, and a

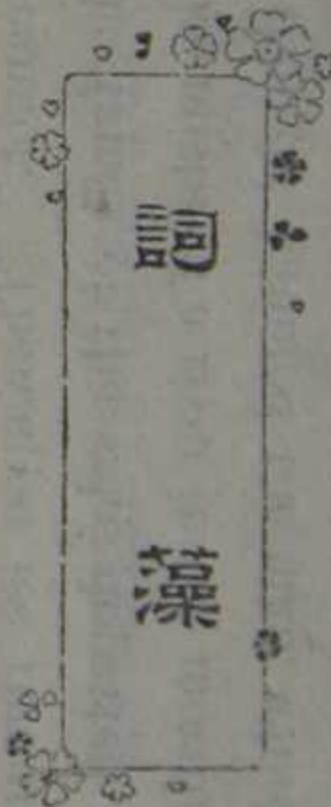
While it was thus going on, the man and the woman were not only scornfully looking at him, but also made sport of him; though these words were not directly addressed, yet he was greatly excited and said, "Are you making a fool of me? So far so good; I expected it. Here, you; it may afford you pleasure, while accompanying such a beauty, to scold these obedient, faithful men and laugh at me, a poor fellow; but do you know under the indolent luxuriant cover of society there are many people faintly crying and weeping from cold and starvation? Alas! Are you drunk even knowing this? You are blocks, stones,—I will say no more, I cannot." Thereupon ice running in their veins, the fumes of the saké departed from their heads like mists off a river in the morning,—a new strange thought haunted the man, which made his cheeks burn once more, and asked, "What are you in the world?" "I am not a man," replied the young man, "to be pleased with such a coldness as you

do; hear me out! I am merely a very poor hard-
 handed orphan, but a student living an independent
 life." On hearing these words, the man was at a
 loss for a time, took out a fifty sen piece from his
 pocket, and threw it on the ground with the
 following words: "Excuse me! We have no mind
 to breathe a bad word to you. If you please take
 this and get some sweets warm to eat. Good night
 to you!" Without any delay, they got out of the
 jinrikishas and in a hurry entered a brothel close
 by, hand in hand.

Afterwards the student was told that the very
 gentleman was occupying an honorary position in a
 certain great association there. He said to himself:
 —"If such a man be called a gentleman, I would
 rather break myself like a piece of glass than be a
 gentleman!" and he sent the money he had been
 given, to an orphanasylum with ten sen he had
 saved.

True gentlemen are frequently seen in lower

classes. "If I lose my honour, I lose myself." —
 Shakespeare.



對水の詞

阿川 絃 浪

美しさかな、水。清さかな、流。われは、あくまで
 水を愛し、あくまで水と親むものなり。なに故に、
 これと親み、これを愛するか。われ、みづからなら
 ぬをかしさ。あゝ、天下いづこか水なからむ。水な
 きところは、遂に、わが住むべきところにあらず。
 潺湲たる清流、森々たる大洋、動きては華嚴の瀑と
 なり、止まりては鴉の海となる。天に宿りては五彩
 の雲、地に溢れては瑠璃の盤、春の野を流るゝ水に
 は寶の玉光れり。冬の磯うつ浪には壯大なる樂器あ
 り。怪しからずや、水にはいかなる靈ありてか、い

かなる力ありてか。瑠璃盤の底、くゞり入らば、必
 美しさ世界もあるらむ。五彩の雲、わけゆかば、必
 天つ乙女も住めるらむ。ゆかばや、ゆかばや、道は
 いづこ、いかにして。

河原のおとゞならねど、わが住家よりは、わがもの
 がほに清き流を眼下に見下し遠山の眉、はるかに眺
 めらる。釣をたるゝ夏の旦、月を弄ぶ秋の夕。吹雪を
 犯して、ホート漕ぎしもこの水なり。鳥なく岸に、
 書をひもとさしもこの流なり。雨の夜、花の曙、な
 どて心の動かざらむ。まど十有餘年來、はなれがた
 き流、わがちほつかなき詩囊は、これによりて満た
 され、わがたどたどしき思想は、これによりて養は
 れたるものを。なつかしやと、わがそゞろなる一團
 の想ひを流るゝ水に、投げかくれば、この流のつゞ
 けるかぎり、いづこまでも、いづこまでも、廣がり
 ゆくに、やがて惚然として眼に入るは、しろがねの
 流、耳に聞ゆるは、水神のしらべ。あゝ、これこそ
 と思へば、ぼつと消えうせて、樂と聞えしは波の音、
 銀と見えしは眼下の流、身は巖上に眠れるなりき。

鳥は

彌 政 三 如

鴉の哺を反して親を養ふ、さながら孝を盡して恩
 に報ずるが如し。白樂天が、鴉を稱して、禽中の曾
 參となし、も實に道理にて、常に鳴く聲さへ孝孝と
 響くなり。さても、俗に、白痴無頼の徒を呼ぶに、
 阿房鴉の名を以てす。されど、帝國の歴史を読む者
 誰か、八咫鴉の靈鳥を知らざらんや。日輪を指して
 金鳥と唱ふるも、亦人の附せし名なるべし。
 鶏は、時刻を報じて、毫も違へず。孟嘗君が、亟
 谷關の夜には、一刻も速く鳴かむことを欲し、わが
 管公が、別れの曉には、片時なりとも遅く鳴けよと
 願ふ。一は、人自ら鶏鳴を眞似さへし、一は「聞え
 ぬ里の曉もがな」とうち嘆く。人間、何を得手勝手
 の甚しきや。
 雀の群りて、麥畑稻田をさして落つる、農夫、甚
 だこれを惡み、或は、案山子を造りて威し、或は、
 網を張りてこれを防ぐ。その夏期にありて、作物に
 及ぼす害は非常の者なり。さすれば、こは、害鳥に
 屬すべきか。夏秋半歳を除けるその間には、何を食
 みてか住む。農作に非常なる害を來す混蟲を食ふ外

はなし。然らば、又益鳥に屬すべきか。且には、太陽の昇るに先ちて庭木を離れ、夕には、入相の鐘の音とともに埒に歸る、かの酒色に流連して歸るを忘るる徒、眼さまし時計を狂はせて、晏眠を貪る輩とは日を同じうして語るべからず。

雉子と鶴とは、鳥類中に於ても、子を思ふ慈愛の心殊に深き鳥なり。『焼野の雉子、夜の鶴』の語は、聞くさへあはれなり。

百舌は、その名のごとく、百鳥の囀ずるを真似することの巧なる、實に驚くに堪えたり。張舜氏は、「學盡百禽語、終無自己聲」の語を以て、百舌を評せしといふ。英、佛、獨、露の語を能くして終に、大和魂をも失ふ者あらば、全く百舌に相同じからむ。

杜鵑が卯の花匂ふ月の夜に、空高く、叫ぶは、何となく物哀れに聞ゆるものなり。この鳥の、さまで詩歌に長けたるにもあるまじく、さりとして、書畫を能くするにもあるまじけれど、その人より受けたる雅號の多きは、何故か。かの、血を吐くまでも歌よめる熱誠を、人々愛で、にやあらむ。この鳥に、勸農鳥の名あるは、卯月の頃、農夫を促し、「田を作ら

ば早く作れ、時過ぎぬれば、登らず」と勸告するものあればなりといふ。

異郷の友

藤野紫郊

若葉、青葉繁つて、杜鵑、血に鳴く夏の夜、それに宵より降り出した雨の陰鬱さ、苦しき頭を抑へて、机に向つて居るのは、到底堪へ切れない。自分は縁先に、ハンモックを釣つて、其中に横りつゝ、考ふるともなく考へた。

そう、丁度、五年前の夏の夜であつた。友人の渡米するのを、横濱に送つて、晩く、新橋に歸り着いたのも、此様な夜であつた。あゝ、流れては早い月日である。もう、春秋は、五度廻つて、余の境遇も、亦、餘程變つて居るのである。

彼は、實に詩人として天才であつた。行く行くは、文壇に、其の聲名を擧げやうと誓つて居た。いつも口癖の様に、天才論を振りまはして居たのであるが一朝、心機が一轉して、筆を抛ち、海外勞動者の群に入つたのである。彼は出立の際に、こう言つたの

である。「自分は、自分の天才を信じて、行く行く、文壇に活動を試み、詩人の榮冠を戴かうと、こう思つて居たが、つらく考ふれば、今の日本の文壇は實に幼稚なもので、まだ、詩人を遇する道が薄

いのである。社會は、詩人を冷かに取扱つて、彼等を、苦境に置いて顧みないのである。僕は、斯かる境涯に蠢々として居るには忍びぬ。」と。余は思つた人生に於て、美しいもの、尊いもの、それはあながち、文藝許りではあるまい。人間の事業は、他方面にも勿論澤山あり。

「詩を作るより田を作れ」で、詩より尊いものは、或は、黄金であるかも知れん。余の一生の幸福は、或は、黄金に依つて得らるゝかも知れん。無論、人間は唯幸福を得んが爲に、齟齬として働いて居るのである。

彼は、黄金の尊さを望んで、弊履の如く、筆を抛つてしまつた。余は、寢覺の折々、彼の未來の詩人の面影を忍んで、ひそかに、涙を催したこともあつたあゝ、早いものだ、相別れて五年の月日は、夢の様になつた。そして、今、彼の消息は、杳として、知

る事は出来ない。此頃は、炎天の下に、鍬をにぎつて、田園を耕して居るだらう。友人の噂に聞けば、彼は、今、南米の某地にかなりの田畑を持つて、資財も、多少出来たとの事である。

それに、余は、尙、碌々たる一介の書生、營々として、書齋の一隅に、筆を甜めて居る。

あゝ、然れども、余は感謝するのである。幸ある美神の前に跪いて、限りなき、榮光に、隨喜の涙をこぼしつゝあることを。

あゝ、彼の友の天才は、實に惜いのである。余は、只、彼を思ふとき、それが一番残念なのである。寧ろ余は彼の心情を憐むのである。彼は、遂に美神の前に額く術を忘れたのであらうか。五年前の彼の其の熱血は、已に冷却して居るのであらうか。余は何となく、悲しくなつて來たのである。尙も、彼が前途について、想像を畫かんとしたが、余が精神は次第に恍惚として來て、果ては、華胥の國に入つてしまつたのであつた。その後のハンモックの上には、余も、彼の友も、何もなかつた。

暮春の川邊

梅田吉郎

青葉茂りて、村々緑にうつもれ、蘆のびて川狭うなりぬ。川の上になちて村の彼方の日を見るに、日は既に山にかゝりて、山は青黒き村の梢に、絶え絶えの紫を見せたり。潮、次第に満ちて、川逆に流れ、水の泡、雪のうかべるごとく、青蘆の影を掠めて溯り行く。やがて、日は紅の球の形して川に落ちぬ。残照林端の空を紅に抹し、水にも其の色流れたり。夕風そよそよと吹き、残照の影も次第に薄うなりぬ。何處の鐘か、杳々として野末を渡る。やがて空はうすぐらうなり、人家の障子に燈火紅に見え初めぬ。

前原騒動

藤井醇一

豪傑の士、交立つて左右を睥睨し、咳一咳、以て征韓のやむべからざるを説く。征韓の論遂に敗れて、西郷隆盛等の辭職となり、尋いで諸所に反亂あり、こゝに、長州萩の城下に前原一誠といふ人あり。窃に西郷隆盛等と謀る處あり、兵を須佐村に集め、彈藥を明倫館にかくまひぬ。適、巡查來りてこれを奪

ひければ、一誠、今はや猶豫なりがたしと、遂に萩の城下に起りぬ。時正に明治九年舊九月十五日の事なりき。この日の午前十一時、一誠は、一隊を渡り口の邊に、又、一隊を明倫館に向はしめ、自ら本隊を率ゐて勘場に向ひぬ。渡り口に向ひし兵は、刀の鞘を拂ひ、大喝一聲、「我等は、前原一誠殿と共に天下を治めんとする者なり。吾と思はんものは、御加勢申すべし。」といひまはりぬ。又、明倫館に向ひし兵は、彈藥をこゝかしこと尋ねれども見當らず。聞く所によれば、昨夜、巡查來り、彈藥を、皆、池に投げぬと。賊兵ども大いに失望し、これを勘場の兵に告げぬ。これより前、一誠の率ゐたる本隊は、小橋川に來り、川縁を楯にとりて發射せり。官軍は竹重増山の家を楯に、賊軍に對し、彈丸雨の如く注ぎ、火焰電の如くに飛ぶ。千電の如き焔炎あり、萬雷の如き銃聲あり。南北ともども發し、白煙濛々として咫尺を辨ぜず。忽にして、火を家屋に放つ。火勢猛烈にして、恰、巨蛇の舌の如く、赫々たる焔を延ばして、順次に嘗め盡す。そが中に、一誠は、憤然として、劍を執つて號令す。忽、走せ來る一兵士

あり。足下に坐して歎いて曰く、「明倫館の彈藥は、皆池に投ぜられたり。」と、一誠これを聞くなり、劍を投げすて、落膽して曰く、「吾が志望は既に廢退せり一舉すれば十害起り、一動すれば十禍來る。不運も亦甚しいかな。」と、遂に、玉江浦に至り、船に乘じて落ち去りぬ。黄金の大塊は西天に傾き、秋風颯々として指月山を射る頃、銃聲は次第次第にやみぬ。

異郷の夕暮

廣兼來藏

いと長い春の日もやう／＼暮れて、西の空には、只濃い紅い雲が、夕陽の名残として残されたばかり。夕鴉は啼いて巢に歸り、無常を告ぐる山寺の鐘は、ゴーン／＼と淋しげに、響き渡るのであつた。そも、沖の島の人々は、此の入合の鐘を、如何に聞くのであらう。我は、此の時、堪へがたい思郷の念に打たれたのである。父上母上は、此の頃、如何におはすてあらうか、姉上や、弟は、上の田の蓮華草の中で面白く遊んで居まいか、さぞ楽しい日月を送つて居るであらう。

前の溪の藤の花は、盛りになり、下の畑の麥も、穂を出して居るであらう。又城將山も、此頃は若緑に蕨も出て、實に登山の好時期だらう。姉上や、弟は最早、登山を試みたるに違ひない。後の庭でも、早や、霧島躑躅が咲き海棠も花を開いたであらう。我はかく種々のことを想像し殆んど思郷の情に堪へられなかつた。

折しも清い笛の音は、颯々たる涼風に和して聞えた空を仰ぐと西の空の雲は、いつの間にか、みんな消えて居る。東の方を見れば、月は青白い光を放ちつつ、我が故郷の方の山端から出て居つた。月よ、月よ、汝は我が故郷の有様を見て來たのだらう。父上、母上や、姉上は、御無事であつたか、弟も恙なく父母の命に従つて居つたか。かく問へども答へず。再び問へども更に答へずして、西へ／＼と只急ぐばかり。

逍遙吟

會友 大賀幾太

○大照院
 三百年の鉾杉高し
 大照院前山門のほとり
 勸行の鐘聲に驚き
 山鳩のさつと群れとふ

○鶯谷囃
 駄馬續く五丁の驛路
 牛追憩ふ六本杉の下蔭
 夕霧罩め行く鶯谷の囃
 山寺の鐘聲に日は暮れ果ぬ。

○漁人
 立ち迷ふ雲霧ははれて
 漁人の櫓の音勇まし
 大海森漫行手は何處
 沖の見島かはた大島か

世

浮世ぞと人はいへども 己がなす罪こそうけれ
 三浦 樫 東

世は塵と人はきらへど おのが作る罪こそ塵よ
 神の手に作りたまひし 世界には塵なきものを
 己が作る罪をば知らて その神を何かうらむる
 草あをく水きよらかに 月澄みて日は明らけし
 天地とひとつこゝろに 世にあらばうさはあらじな
 塵はあらじな

長州男兒

由 坂 榮 助

四方に芳りを敷島の 大和をのが梓弓
 春野の花は吾々に いかなる教へを與ふらん。
 見よも、草は茂るとも 紅花はいかてかくるべき
 英雄ひとたび功成らば その名は久しく薫りなむ。
 草木とならば春の野に 花と咲きてもかをれかし
 人と生れて世にあらば 世界に名譽を輝せ。
 そも我が郷を人間は、 維新のむかし世の中に

忠勇義烈の名を得たる 男子に富める長州よ。

競 漕 會 (明治三十八年十月十八日)

桑 原 雅 亮

熱き涙を揮ひし、 國に盡し、先輩は
 阿武の川邊に生ひ立ちて、 宇宙に花を咲かせたり。
 花咲かせたる神々や 生きながらへる先輩は
 どうぞ我等が意を繼ぎて、 御國に盡してくれよかし。
 ひとたび得たる長州の 武き威名は埋むなよ
 永久へさして長門より、 豪傑いてよと祈るらん。
 こゝに我々後進は 懸軍萬里に令すべき
 能識作りて先輩の 待つらむ心をやすめかし。
 他郷に學んで成る迄は、 鳳翔山は越ゆまじと
 千里の駒の心にて 長州男兒は奮ひたて。
 競争烈しき御世なれば 成功の實を結ぶべく
 咲くやその花いと多し 長州男兒は心せよ。

浮雲いつしかさえはて、瑠璃の色濃き大空に
 有明の月影清く 無名の星もまた、けり
 第六回の紀念式 昨日終へたる校友の
 餘勇を鼓して集ひ來る 阿武の川面霧晴れて
 今し催す舟競ひ 汀につなぐ三隻の
 船は嵐に千鳥號 其の名も早き早瀬艇
 しるしの旗を翳しつゝ、 ともづなときてゆう／＼と
 ゆくては何所河添の 彼方に見ゆる出發點
 笛聲きゝて三つの船 漕ぐ手亂れずいさましく
 諸聲合せ眞直に 決勝點へといそぐなり
 折しも起る音樂の 調に合す歌の聲
 應援せんと旗ふりて 各級艇も勇むなり
 かくて近づく赤白の 二艇いづれと見るうちに
 銃聲ごうと轟けば 赤旗高く揚げられぬ
 晴れたる虹と横はる 橋本橋上山をなす
 人のどよみに波たちて げに勇ましき風情なり

やうく度もかさなりて、終近つくその時に
 節面白き音楽の 聲湧く中を勇ましく
 波なき水に波をあげ 先を競ふは選手艇
 勝敗既に極りて 耳を劈く銃聲に
 競漕會も閉されて 樂しき今日も暮れにけり
 集ひし人はそれ／＼に 西へ東へ北南
 三々五々と歸り行く 其の影黒く見ゆるなり

長門の國

石川光一

一、 長門の國は本州の、 西のはてなる山口の、
 縣の半部を占むる國、 北に望むは日本海、
 響の灘は西にして、 瀬戸内海は南方に、
 三面海に圍まれて、 東は石見安藝の國、
 巽の方に連れる、 周防は縣の半部なり。
 二、 方里は二百にほど近く、 國は五郡に分れたり、
 人口凡そ五十萬、 戸數八萬餘なりとぞ、
 よし人數は多からず、 山河他國にまさらずも、

國を飾れる英雄は、 御空の星か碁の石か、
 揃ひも揃ひし傑士等は、 御國の礎固めなり。
 三、 思へば昔幕府の末、 世は内外の紛擾に、
 人心激する其折柄、 我が長州は時正に、
 豪傑雲と湧き出で、 英雄星と輝きぬ、
 吉田、高杉、木戸、久阪、立てし勳の山縣や、
 伊藤、井上、品川等、 いつれか國につくさるる。
 四、 三百年來因襲の、 秕政、始めて改り、
 草木も仰ぐ日の御子の、 御威稜を此に輝かし、
 萬機維新の基をば、 立てしほまれの人々ぞ、
 我が此の國はかくばかり、 よき人出てしうまし國、
 秋の錦とさく萩の、 名は外つ國の人も知る。
 五、 世の文明はいやましに、 進みて已まむ時あらず、
 我等第二の國民は、 功を立てし先輩の、
 赤き心を受けつぎて、 嘗膽臥薪の苦を辭せず、
 學びの海に棹さして、 希望の岸にこぎ渡り、
 共に覇を呼べ我が同窓、 嗚呼心飛び肉躍る。

落花

田中貢

ああ美はしき櫻花、 ああ見もあかぬ櫻花、
 指月の櫻見て來んと、 入日をおひて行き見れば、
 花衰へて色あせて、 そよ吹く風にちら／＼と。

「三日見ぬまの櫻哉、」 さりとは餘りはかなしや
 雲や霞と咲き亂れ、 人酔はししは昨日なり、
 今日吹雪と亂れちり、 歌人の袖にかゝるなり。

昨日は枝に今日は土、 ああ櫻花ああされど、
 かくて眞の花なれや、 花もし散るを惜まんか、
 名なしの花と何擇ばん、 誰かはかくて愛せんや。

いつしか暮れて月でいぬ、 梢にかゝりて淋しげに、
 昨日は花の間より、 もれて匂ひし月かげも、
 花まばらなる枝の上に、 空しく宿りて光るなり。

月大空にのぼり行き、 散る花しげくなり増る、

故雨谷校長の一周年祭に

安藤紀一

春はゆくなり花と共に、 我も歸らん花も行け、
 ああかへらましあゝさらば、 また來ん春のあるものを。
 ありし世のはかなき事をしのびつつ 安藤紀一
 此の一とせも夢と過ぎけり
 立ちかへる秋もうらめし現世に
 まつかひもなき君を思へば

校旗

同

うるはしく睦みて學ぶ心より
 この旗を教の道の神ぞとも 作りいてたるこれの大旗
 齋かざらめや仰がざらめや
 掲げては人にも見せむ旗の色の
 ふか紫のふかきころを
 この旗のゆかむ處は野も山も

學びの庭と思ひてあらむ

花さかば花にもかをれ雪ふらば

ゆきをも拂へこれの旗風

新しくつくりて建つるはた竿の

なほさ心を心ともがな

うるはしき譽れを負ひて麗しき

此大旗をもつ人やたれ

春二首

中子 舟月

春雨にもえいづる草の露の上に白き小蝶の一つ
とまれる。

志都岐山ことしの花をとほぬまにいつか青葉と
なりにけるかな。

春のこゝろ

彌政 三如

春曙 (小題)

天のとの雲はほどなく分るらむ遠里にひびく鶏
の一こゑ

更衣

何となく春の心の去りかねてまた身にそはぬう
す衣かな。

千鳥

さ夜ふけて千鳥しばなく聲すなり沖つ汐風さむ
くなるらし。

鏡

ます鏡すがたばかりはうつせどもうつさぬもの
か人の心は。

萩の四季

木原直孝

白雲の、わくかと思しは、指月やま、櫻の花の、さ
かりなりけり。

涼しきに、舟をうかべて、新川の、風を夜毎の、よ
すがとぞせん。

濱さきの、橋のかなたに、霧こめて、山本ちかく、
雁鳴きわたる。

風さむき、嶽の御堂の、夕雪吹、あはれなるかな、
順禮一人。

露の野 (總題)

木原直孝

親のうせしとき (小題)

事ふべき、父はいまさて、たゞ一人、夕の野邊に、
泣きつゝぞ居る。

露の野に、つまれん花の、れんげてふ、臺に父の、
今まさんとは。

おくつきに、ばらの一花たむけして、歸る野道に、
雨のふりさぬ。

折にふれて

雪ふりて風の吹く日に、立ちまよふ、かたむはいか
に、わびしかるらん。

春十首

香積 鶯水

道の邊の柳の絲のかすみつゝ、

なびくを見れば春風を吹く

見渡せば花もありけり遠里の

かすみにくもる春の曙

子を思ふ野山のさゝすかりひとの

詞 藻

驚かすとも聲をな立てそ

峰つゝき雲か雪かと思えつるは

咲ける盛の櫻なりけり

花さかりつとへる友となかき日を

なかめ暮しぬ山かけのいほ

みそらより今はと落ちし夕ひはり

麥生かくれになほなきてゆく

かはづなく川そひ小田に水せきて

けふしつ男のゆたねまくなり

きのふまで雲とも見えしさくら花

けふは雪とぞふりそめにける

しつかやのそのふも春のやゝたけて

匂ひそめぬるふかみくさかな

梢みな青葉の外に色もなし

かけたにうとき庭の面かな

俳句五句

富田 小人

春の月

くれきつて若葉にくらし窓の月

うぐひす

鶯のやさしい聲や簾の内

五月雨

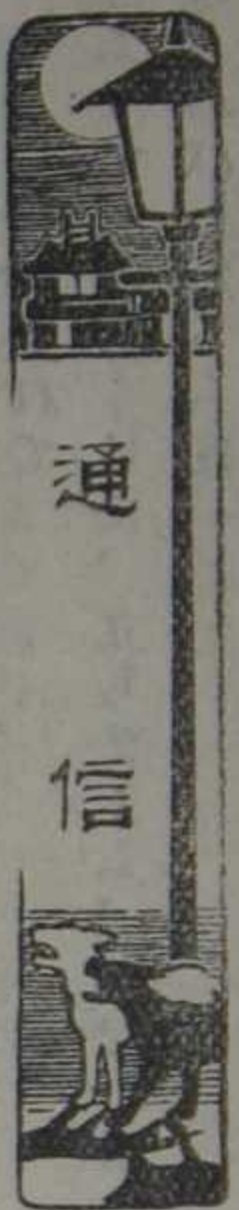
軒ふりて雫にかざる五月雨

夕立

夕立や辻の菓子屋のにげたあと

戦死者の墓前にて

露冷し草むす屍今いづこ



東都だより

東京帝國 大學工科大學 永田民也

惟ふに、今は、一刻千金に値する好期なるが、校友五百の健児には、意氣頗る高き事と思ふ。諺に、光陰に關守なしとあるが、實に、尤の事で、小生等が御校を出てから、星霜を経ること、既に四年である。されば、日に堂に見、庭に見て居た校友諸君の多數は、最早業を卒へられたから、今では、小生を知つ

加ふるに、關東平野を拭ひ來る風は、これを吹き飛ばして砂烟をなし、その勢の逞しい事は、支那内地に於ける、紅塵萬丈と云ふ有様を想ひ起さしむる位である。絶えず、撒水はなされつゝあつても、直ぐに乾燥して、復、砂烟を起す。されば、眼病を起し、肺を害し、脚氣症に罹るものが少くないのである。然れども、一朝、雨が降ると云ふと、今迄の塵埃は皆悉く泥土に化し、恰も、路面一様、厚さ一吋位、お汁粉を流した様で、通行の困難實に思ひやらるゝのである。辛さは、反て砂烟よりも尙悪い。併し、降り止めば、直ぐ乾いて、元の如く塵埃を飛ばす。その變化の速なるは、實に、考の外に出づるのである。抑も、ロードは、人馬の通行、荷物の運搬上實に樞要なるもので、ある時代に於て、その人民開化の度を計るべき、フイジカル、シンボルとまで云はれる程のもので、その發達如何によりて、交通の頻繁であるか、なさか、又、従つて、その地の商工業の振、不振も卜知することが出来る。それに一國の首府たる、東京市の街路が斯くの如しとすれば、歎かはしき事である。元來、當地の街路は、概して、

て居らるゝ方は、極、僅てあらう。僕は、當地にきてから、日極めて淺く、従つて、觀察も亦極めて不十分であるが、只、一つ二つ、感した事項を御知らせうと思ふ。固より、當地と雖も、鳥はかうかうと鳴き、雀はちゆちゆと云つて居る。月が三角形をなせるでもなく、やはり圓形に見え、時に盈尺あるは勿論の事である。小生が初に驚いたのは、書生の數の多いことであつた。何分、國の首府、學界の中樞に位して居る事なれば、當然の事なれども、餘り其の數の多いことには、驚かざるを得ない次第である。特に、本郷や神田は、その巢窟とも云ふべく、路上會する人の内、九十パーセントは、書生と云ふも過言ではない、勿論、男女學生を總て一纏めにして云うたのである。警視廳の取り調べたるものに依れば本郷のみにても、其の數、萬以上で、全市中には優に十萬を超過すとの事である、以て、其の概略を想像する事を得るであらう。次に、吾人の眼中に映ずるものは、市街通路の不完全なる事なり。晴天の日にありては、可なり良好なるも、人馬車輛の通行頻繁なるがために、塵埃の生ずること實に夥しい。

グラベルロードであるが、雨天の際泥土を生ずるは單に塵埃によるのみではない。路のペーグメントの基礎が不完全なるため、路面上の雨水は、これを透過して地床に達するからで、地床は泥土に化して上昇し、砂利層を貫き、路面に顯はるゝものである。之を救ふの良法は、基礎を堅牢にし、上に煉瓦又は花崗石を敷くか、或はアスファルト若くはウッドンペーグメントにするか、コンクリートで固めるかである。固より、排水の事を考へなければならぬ。そうなると、亦、下水を改良する必要がある。而して、既成の上は、常に修繕を怠つてはならぬ併しこれは、現今の財政上、許されない事は、火を見るが如く明である。實に道路改正に關しては、當局者が大に心を苦めて居る所であるが、改正の實行さるゝは、蓋し、遠き將來のことと思はれる。以上は、何人と雖も、當地に來たらん人には、直に感ぜらるべき現象であるが、余は、尙進んで、當地生存競争の如何に激烈なるかを述べ、併せて、諸君の御注意を促さんとするのである。世の進化開明と共に、生存競争の益激烈となるべ

きことは、今更論すべきことではない。到る所、この現象は表現せられて居る。併し當地では、尙明にこれを認め得るのである。國では一丈の勞力に對して、一丈の収益を獲るものとすれば、當地にては、これに三倍するエチルギを費して、僅に、二倍に相當する收得を獲るのである。されば、一方に於ては、國に於けるよりも、尙多くの仕事を見出し得る。プロバビリチスはあるも、その勞力に對する報酬は國などで受くべき筈のものより、遙に鮮いのである。故に、實力に富み、加ふるに、身軀強壯、よくこの激烈なる競争に堪へ得るものは、益成功して、日々その業務を擴張し得るに反して、これ等の人々と、争ふ丈の資格なきものは己のなすべき事は、皆人のために奪ひとられ、空しく、競争場裡の外へ驅逐せられてしまふ。而してこの恐るべき生存競争は、人口の増加につれて、益烈しく、世が進化するに従つてその激烈の度を高めるので、恰も、物躰の落下するとき、地球引力のために、加速度を得ると同じ事である。昨日よりも今日、今日よりも明日と、刻一刻、絶えずアクセルレイトして居る。従つて、一通りでは生

活し難くなるのである。卑近の例をとれば、當地が小學校では、所によつて、ある組は、午前中のみ業のあつて午後はなく、又他の組は、午後から始る所がある。併し、教師は、同じ人である。つまり、一人で、二人前の事をやる理になる。併し、俸給は、これに正比例しないで、只、少しく多くなる位の事である。終日、講義して、復、家に歸つて、自ら研究しようと思ふれば、其の困難は、一通りではなからうと思はれる。これは、只、生存競争の及ぼした、一の餘波に過ぎないのであるが、かゝる例は、實に、枚擧し切れない程澤山ある。次に吾人學生に及ぼす影響は如何なるものかと云ふと、これ亦、甚しいものである。四圍の情況が、前に云つた通りであるから、今から漸次、その中に立つて、働かうとするものは、充分の準備をしなければならぬのは勿論の事で、日夜孜孜として、實力の養成に勉めて居る。従つて、復、その間に競争が行はれるので、中々激烈なるものである。されば諸君の内に、東都に出て學ばんとせらるゝ方は、充分の覺悟をして、上京せられねばいけない。只、面白い所に違ひない、日比谷の音楽

堂で音楽も聞かれ、上野や隅田の櫻も見られると云ふ様な考を持って出て來られると、それは大變のことになるのである。僕等は、御校に御厄介になつて居た頃、先生が病氣か何かの都合で缺席せられると、萬歳と呼んで喜び騒いだことは、一度や二度でなかつた。又、時間が終へても尙講義を續けられると、不平を鳴らしたこともあつた。併し、今ではそんなに呑氣にして居る譯には行かない。直接自分の將來の利害に關係することであるから時間後三十分や一時間講義を續けられても、何もいふものはない。否寧ろ感謝して居る次第である。それもその筈、學校の小使でも、勤務の餘暇に原書を繕いて、三角術の研究に餘念もないといふ始末である。彼等の多くは夜學校に通つて居るが、又本校に來て居るのも、晝に糊口を凌ぐのみが目的ではない。多少研究の手段ともならむとの希望を抱いて居る。それ故、原文の意義、問題の解釋などを、屢吾々に向つて質問するのである。その節、いろ／＼尋ねて見ると、諸器械の名稱や、テクニカルターム等随分辨へて居る。勿論、その學んで居る程度は低いにしても、感ずべき

ことゝいはなければならぬ。これを見ても、當地は多少趣を異にして居ることが知れるであらう。授業は八時より四時まで七時間あるが、中食後一時間の休憩時間にも、尙製圖をやるといふ有様である。其の外宿題が澤山出るが皆計算の極めて面倒なもので對數表を引いてこつこつやるのである。試験は毎週一回づゝ必ある。その際に指定せられた参考書を讀まなければならぬ。だから、今頃は實に多忙の時である。諸君等の中には、中學時代は數學もあれば、動物もある、歴史もあれば漢文もあつて、實に八百屋といふ有様、好きの學科もあれば嫌ひのものもある。併し専門の學を修むる時は、只己の好める一科を研究することであるから、趣味を感じると共に樂になつてくると、思はれるものがあるかも知れん。勿論好める學科を究むることだから、趣味を感じることには明であるけれども、決して樂になる氣遣ひは毛頭ないのである。専門の學科をしらべると云ふても、その一科ばかりではない。必ずこれに附隨して、數科のものを學ばなければならぬ。例へば物理學を研究しようとするに、只一通りその大要を知るに止る

位なれば別に何もやる必要はなけれども、精密に研究しようとするれば、コニツクやカルキュラスの力を待たなければならぬと同じ事で、凡て、ある一學科を精しく知らんとすれば、これに關連せるものをも辨へねばならぬ。故に、深入りすればする程、研究すべき事項が増加するのである。だから、今より面倒になつても、決して、樂にはならぬ事は請合てある。こゝは、諸君の一考を煩す所で、人がやるから自分もやつて見よう、何だか面白そうであるなどと云ふ様なことではいけない。先づ、實際その方面に、自分の頭が適當して居るか、否やを熟考しななければならぬ。後になつて、悔ゆる事があつてはならない。何れの方面に向ふも、今よりも餘程辛いものと、覺悟せらるゝ事が肝要である。尙、氣付いた事を一つ二つ附加して置かう。今では、諸君等は、概ね教科書を使つて居らるゝが、これから他の學校へ進學せられた時には、凡て、教授の口演を筆記せねばならない。初めの間は、中々困難なるもので、その講義の速度は、極めて速いのが普通である。

されば、今頃から先生の講義を筆記せらるゝ機會譯である。幸に諸君は、吾人の轍を蹈んではならぬ例を學生にとれば、その優劣は實に天賦の才能のみには依らない。英雋も其の才を恃みて勵まざれば退歩し、凡庸のものも雖も、勵みて怠らざらんには、尙よく衆を凌ぎ得るのである。又、學課の性質によりては、必ずしも、明晰なる頭腦を待たずして、時間と努力とを惜まざれば、よく成し得るものもあるこれ乃ち、吾人が日常ある種種の計算に於て、見出し得る適例にして、一定のフォーマラに従つて、只器械的に複雑なるプロセスを経過せば、正確なる結果を獲得する事が出来るのである。この種のものに於ては、その進歩の度は、唯時間と努力とのファンクシヨンである。之を要するに、優劣の差を生ずるは實に勵むと勵まざるとによるものにして、その勉め得る限界は、身軀強弱の事情によりて支配せらるゝものである。假りに身軀虛弱なりとせんか、心ばかり早れども、實地これを行ふ事が出来ない。是に於て、遺憾ながら競争上劣者の位置に立たなければならぬ。これ乃ち運動の必要を叫ぶ所以にして、假令ひ頭腦は甚だ明快ならずとも、身軀健全

があつたら、なるべく、速く書き取る習慣をつけられた方が、得策だと考へる。次に、數學の問題をソルブする事であるが人によると、ブリンシブルさへ知れたら、答は何でもよしい。何れ精密にやれば、答は出て來るとの主義で只式ばかり書いて計算しない事がある。又は、前題と同じメソッドで解けるものとして、全く顧みざるものもある。併し、これは悪しき習慣で、答が出てなければ、ジロである。實用には、何の役にも立たないのである。かゝる人は、後日實地に當りて、種々複雑なる計算に際して、其の結果を見出すに苦しむのである。されば、日常問題をソルブするときは假令ひ、メカニカルで無趣味であると思つても、最終の結果を得るまでは、中止せざる慣性を附けて置くことは、將來のために必要なる條件である。終に臨み、尙諸君の配慮を望むべきは運動の必要であるが、僕等の如き餘りこれを重要視しなかつたものは、この點に就きて、論ずる資格はない。然れども不便を感ずる度は反て、強く益その必要を認識する。故に禁じ難き婆心に驅られて、聊卑見を述ぶる

の人こそ最終の勝利者たりと呼ぶ譯である。實に諸君の前途は遼遠である。充分意をこれに注がれん事を望むのである。一般に、軍人志望者は、身軀の健康に注意し、諸般の衛生といふ事に重きを置いて居るが、他専門學校に入らんとするものは、體格検査なる難關門を通過する要がないから、近視眼にならうと、雙にならうと、無頓着なる人が多い様に見受けける。併し大なる誤である。精密なる製圖を書いたり、野外に出て、測量に従事して居る時など、毫厘の差を争ふて居る際には、特に視力の強きを要する先達ても眞北測定のために、天鉢の觀測をやつた場合に、近視の人の鮮からぬ不便を感ぜられたのを目撃して、大に感じた所があつたから、こゝに附加した譯である。

以上は唯上京後、僕の氣付いた大要に過ぎない。尙今後歲月の経過と共に、小生の眼に觸るゝものあるであらうが、有益と認むるものは、通信するであらう。國家多事にして、人材を望める時、幸に自重せよ、校友諸君。

駒場より

厚東健 二一

這般校友會雜誌第五號御發行の趣、通報に接し、今更のやう、母校の恩師并に同胞諸君の慕はしく懐しく、基より動かぬ筆を無理に動かして、聊か當駒場の消息を傳へんとす。全く回想の念より溢れたるものと御承知被降度候。

却説、駒場の地なる東京を距る西南一里餘に有之候得者、萬丈の黄塵を絶ちて、空氣極めて清鮮、加ふるに風光亦秀麗なり。花の朝、紅葉の夕、廣漠たる農場の間に立ちて、薰風に面を掃はれつゝ、遙に西天を望めば、平和の氣充ちたるか中に、姿不變の白扇は嚴めしく倒に懸る。誰か疑はん「駒場富士」の名虚しからざるを、誰か愛せざらん、この自然美を。斯れは如何に我が駒場が精神修養上並に健康上に好適地たるかは喋々する丈け野暮に候。

わが駒場農科大學實科には、本科に準じて農學實科、林學實科及び獸醫學實科の三科有之候。就中、農學、林學の兩實科は、吾關せざる所なれば、知る由も無之、以下吾か専門とする獸醫學實科に就て、少しく

く鑑詰用牛肉の不足、曰く在來馬匹の小且つ不足、

こは既に卿等も御承知の事かと存候。

一瀉千里驅け屠るてふ彼のコサツク兵も、劍には値なく馬にあると申候へば、馬匹も亦確に強兵の一要素と可申候。果然、當局者も茲に看る所ありて、此度馬政局なるものを新設し、今後三十年計畫を以て専ら本邦馬匹の改良に著手せんとす。國家の爲め慶すべきの至に御座候。以上は單に馬匹の改良のみに止め候得ども、其他の家畜も同様、改良の急を要するは勿論、一々述ふるとすれば盡くる所を知り不申候。右の次第に就き、我獸醫學か本邦現下の狀況に徴して如何に緊要なるかは、何人も推考の出來得る事と存候。職に上下の差なく、業に貴賤の別あるなし。上下貴賤は唯々外觀上の事のみ。而も卿等一意國家に盡すの赤心だに有せられ候はば、外觀上の事位は敢て意に介するに足らざる事と存候。要は唯少しにて、而も社會國家に盡すこと多くして、而も最も要急のものに就くにある事と存候。希くは同好の士よ、馬首を我科に向けて鞭ち來られんこと切望して已まず候。敬具

陳ふる所可有之候。

抑々我獸醫學は、古來人の最も賤業となし、稍ともすれば馬喰と同一視せらるゝの嫌有之候。其もその筈、我國古來の獸醫は無學にして道德の何たるを解せざるの徒、無言の獸を借り來りて、八方奸策を逞う致候儀に是れ因ると存候。されど、是は昔日の夢と化し去り申候。現今の獸醫は決して斯る淺ましきものに無御座、其の深淵なる學理を應用する上に於て、其の徳義を重んずる上に於て、人醫に半歩も譲るなく、恒に平行して相進み居候。而も、其の範圍に至りては優に彼れの上の有之候。即ち純獸醫學の外に、尙ほ畜産學、乳業論等種々の趣味ある學科をも包含致居り候へば、將來牧畜事業でも營みて、繁雜なる社會の彼方、平和の天地に逍遙し、罪なき羊と生を送り、乃至は我國の家畜を改良して、直接間接に社會國家に貢獻せんと欲する曹よ、來れ、吾は卿等と手を携へ度候。

今や、我國畜産事業改革の急務たるは嘗に平時の事に止らず、一旦緩急あるの日、愈々以て其の必要を感ずること大なるは日露戰役に始らぬ儀と存候。曰

在東京河野通毅君より

花橘の香する頃と相成申候。昔なつかしさぞとゞめがたく候。殊更春漸く暮れんとするに愈多感の涙の催され候。思へば指月の山の麓なるかの白聖のいかめしき母校を出て候ひしは、はや四年の昔に御座候ひき。身にふさはしからぬ望を抱いて、はるけくも旅路にさすらひの身となりしより三年の間。唯夢にのみ鹿脊坂の洞道通るばかりに候。さるにても、うらぶれ果てし身にも、尙かすけき希望の光仰ぎて、ひたすらに彼方の星にあこがれつゝありし間に、故里はいかばかり變り候ひしにや。夕の雲は朝の雨、變るは浮世の習に候へども、情なくもなかく秋風のつらく吹き候ひしにや、雨谷校長は逝き給ひぬ。其他我が教を受けし先生は大方は榮轉し給ひしとか生者必滅會者定離、悲しうこそ。さるにてもかはらぬは我が身に候。依然として吳下の舊阿蒙江湖の窮措大、げに恥しう候。(中略)「怪物の正體見たり枯尾花」指月會雜誌とはこんなものかとの批評も有之事と存候。實に豫期せし程のもの出來ざりしは編輯

人として相濟まざる次第に候。第二號は十月下旬に發行可致候間、何卒九月末日までに續々御投稿相成らんことを御願申上候。(下略)

在早稻田大學吉富嘉春君より

(前略)早稻田大學の柔道部は中々盛なものです。今の所で三段が一人二段が三人初段が十五六人一級が七人二級が十二人三級(乙)が三十人も居ります。地方の柔道等に比較すると、その進歩の速きことには驚く外ないのです。又、地方で田舎初段とか二段とかいふ人々でも、東京では甲組(一級二級)へ入れられるので中々たまたまのものでありません。現に私も中學に居る時、去年の二月頃は一級であつたものが早稻田へ来て五月の勝負の後ヤット三級(乙組)に入れられたのです。十月に二級となり、此年二月にヤット一級になつたのです。それで諸君も、おれは萩中學の甲組だとか乙組だとか鼻を高くして居て、講道館へ行けばいつでも甲だとか乙だとかになれると思つたら大間違でありますから、何卒左様御承知なすつて、益斯道をお勤めにならん事を切に希望致します。

ます。(下略)

軍艦姉川乗組三戸基介君より

數日前當鎮海灣に回航諸操練に従事致居候。歴戰の將士一百餘人尉官室に閉ぢ籠められ、意氣天を衝かんとす。云々。



塚本校長の轉任

三春の花に開落、九秋の月に虧盈、もの毎に同じかたには、しばらくも止らぬ世の常として、免かれ難き數とはいひながら、雨谷校長の遠逝以來、その後を襲がれて、吾等を熱心に誘掖せられたる塚本校長は昨年九月一日を以て、遠く本校を去つて第二高等學校教授に榮轉せられき。是よりさき、八月二十四日その旨官報を以て發表せられ、全三十一日職員生徒は、雨天體操場に會して告別式を行はる。時や恰も

暑中休業中のこととして、列席者僅に百三十餘名なりしは、實に吾等の遺憾置く能はざる所なりき。岩田先生轉任の旨を報じて惜別の辭を述べられ、生徒總代として、五年生青野直彦惜別の辭をのぶ。先生は三十三年四月本校教諭として就職せられ雨谷校長の後を襲ぎて校長となられしは實に三十八年十二月七日なりき。あゝその開始ど六春、本校の創立以來、幾多の不便を忍びつゝ、諄々として教へ、子を思はむ親の心を以て、吾等を慈み訓へ給へり。今や雲山萬里遠く仙臺に去られぬ。吾等の情はたまたいたかに。吾等は、今後、鳥がなく東の空を望まむ毎に、先生のみ教を想ひいでて、ひたすら學びの道を勵まむのみ。

羽石校長の來任

さきに塚本校長の本校を去られしより、吾等は、ぬば玉の暗の海原にたゞよふ小船の感ありつる時しも空高く馬肥えて吹く風新らしき去年九月のなかば、うれしや、羽石校長は長崎縣立島原中學校長より本校に轉任せられて、吾等の進まむ、この暗の船路を

照らし給ふこととはなりぬ。九月十九日校長は山口より着萩せられて、翌二十日講堂に於て、その新任式舉行せられぬ。

吾等の悦び何物かこれに過ぎむ。

羽石校長は、先に校長なりし雨谷先生と同期に大學にありて國史を研究せられ、卒業後、中等教育に従事せらるゝこいとゞ深かりき。今や、校長は本校に來り給ひぬ。吾等はみ教のみ光に、わが校旗を押し立て、學びの海の果遠く、荒浪こえていざ漕がむ

舊師を送り新師を迎ふ

大澤保三郎先生、三十八年一月以來、柔道指南の任に當りて盡瘁せられ、斯道に於て、多く我が名譽を失墜することなからしめられしが、本年一月、滋賀縣立膳所中學校へ榮轉せられたり。

住永啓八先生、三十七年八月就職せられ、久しく單身以て全校肄操科教授の任に當り、些の倦むなく、些の遺漏なく、専心教養に盡力せられたり。その勞その功、永く忘るべからざるなり。本年二月、徳島縣立富岡中學校へ榮轉せらる。惜むべし。

宮澤精一郎先生、我が校の門に入りしもの、誰か先生の教を受けざるものあらん。先生今や去つて徳島縣立徳島中學校に榮轉せらる。校の内外、これを聞きて惜まざるもの果して幾人かあるべき。先生は、三十三年五月來任以來、六年の長き、或は國語漢文科主任として、或は文藝辯論部長として、終始一日の如く、薰陶に心を砕かれたり。三月三十日の朝まだき、此の山水を背にして遠く去らる。ああ。

玉木直保先生、先生は、三十三年より、實に六ヶ年の久しき間、劍道の指南として、武道の發達に盡され、本校斯道の今日あるを致されたり。本年三月退きて歸臥せらる。惜むべきなり。本會は金圓若干を贈りて、その勞に酬いたり。

坂田庫吉先生、三十四年二月來任以來、英語科に教鞭を執らるること五年の餘に出で、常に溫容以て吾等に接せられたりしが、本年四月、職を退きて東都に上らる。ああ、再、先生に接するを得るは、それ何れの時ぞ。

中山安之助先生、三十五年八月、來りて國語漢文及歴史を受持たる。溫和の資は發して親切なる教授と

留守第五師團長陸軍中將眞鍋斌氏は、公務を以て來萩の際、出身地の學校なればとて、特に一日を割きて來校せられ一場の談話ありたり。左にその要領を掲ぐ。

露國と戦ひて勝つは大和魂あるにより、この精神は、生ける神即ち大元帥陛下を軍旗の神體として戴けるあるによりて起る。これを押立て、進むが故に、我が軍隊は勝つなり。凡て、全國皆兵主義は完全なる軍隊を得る方法にして、我が國は即ちこの主義によりたるなれば、直接軍務に就かざるものと雖ども、軍人の基礎たるべき五ヶ條の勸諭を服膺すべきなり。學生が、學に勵むは忠節にして、艱難に屈せざるは武勇なり。而して、質素は學生の最實行せざるべからざる要事なり。余は、不自由なる境遇に人となりて、今日あることを得たるものなるが、その經驗によれば、人は不自由なる方却て勉學に好都合なり。

光藤健介君の葬儀

本校卒業生にして、一昨年八月旅順第一回總攻撃に際し、勇壯なる最後を遂げられたる、故陸軍工兵少尉正八位勳六等功五級光藤健介君の葬儀は、昨年六月一日、吉田町三千坊にて行はれたり。校友會よりは生花一對を贈り、職員及五年生一同會葬せり。此

なり、吾等は永く先生の恩波に浴せんことを願ひしに、本年四月、退きて郷里に歸られたり。惜むべきかな。

吉田六造先生、昨年十月、躰操科教員として來任、最意を精神の修養に用ゐらる。

相島直一先生、本年三月、同じく體操科教員として來任せらる。前に吉田先生を得、又、相島先生を得て、吾が校の面目更に一段の新を加ふべし。

中島豊之先生、本年四月、地理歴史科教員として就任せらる。先生は又、至心流劍道の達人にして、囑を受けて擊劍の指南に當られ、銳意薰陶に従事せらる。我が校の先生を得たるは至幸なり。

山本光二先生、本年四月、數學科教員として來任、熱心に教授せられつゝあり。由來、數學は學ぶもの難しとする所、先生に待つ所豈尠少ならんや。

廣瀬菊次先生、本年四月、國語漢文科教員として就職せられ、親切に教導せらる。

眞鍋中將の來校

(明治三十八年五月十日)

の時、塚本校長は、一同を代表して、痛切悲壯なる弔辭を朗讀せられ、一同感慨の禁ずべからざるものありき。

戰勝祝賀式

日本海の大戦に、敵の艦隊全滅せりとの報至るや、健兒勇躍、血湧き肉躍る。茲に、六月五日といふにその祝賀式を講堂に擧げらる。塚本校長の、東郷司令長官に贈るべき感謝狀の朗讀あり。次に、中村先生は、例の快辯を揮て、波艦隊の東航より海戦の状況に至るまで、圖により、表を示して、詳細に講話せられ、目出たく、この記念すべき式を終へたり。

片岡田原兩君の永眠

第五學年片岡俊三君は、明治三十八年七月十一日、腦充血にてはかなく黄泉の客となれり。君は小軀なりと雖ども、骨格逞しく、器械躰操に秀て、常に學業の傍よく家事に盡瘁せられたりといふ。第三學年田原新助君は、溫厚にして精勤の聞えありしが、これまた、昨年八月三十一日、脚氣のために

襲はれ白玉樓中に入れり。玉碎け蘭折る。共に惜しむべきかな。

雨谷前々校長の一年祭

雨谷羔太郎先生逝かれて茲に期年。十月十二日といふに、職員生徒の有志相會して、その一年祭を指月社内に擧げて昔を偲びぬ。あはれ夢の如きかな。

校旗發表式

明治乙巳十月十八日、午前九時より、我が校第六回紀念式を擧行せらる。瀧口代議士外數十名の來賓參列せられ、羽石校長の式辭に續いて、瀧口代議士の精神教育に關する演説ありて式を終へ、更に、いと莊嚴なる校旗發表式を擧げらる。校長の校旗に關する嚴正なる訓諭演説あり。方三尺餘もある濃紫の鹽瀨織地に、金糸もて校章を刺繡し、縁は同じく濃紫の総をもて飾られ、長さ一間餘の黒き竿の頭には、亦、金もて校章を三面に表はし、燦然として、人目を眩せんばかりに崇高美麗なる校旗は、岩田教諭の手より、恭しく校長に進められ、校長は謹んでこれ

を御聖影室前なる旗架にたてられたり。こゝに於て、一同これに對して敬禮を行ひ、校長は次の如き誓詞を朗讀せられ、校旗は、再、岩田教諭の手によりて納められたり。これにて式を終了し、一同退散せり。猶、午後には餘興として、新造の和船を用ゐて盛事なる大競漕會を催したり。

誓詞

あゝ、崇むべきこの校旗、あゝ、親しむべきこの校旗、金章の煌々たるは、奮發勉勵の象あり。紫條の整齊なるは、協同統一の義あり。洵にこれは徳業進修の典型、校風發揚の本源なるかな。吾人の精神は、一に、この校旗によりて鍛練せらるべく、校旗の纏る所は、即ち、吾人の精神の統一し、活動する所なれば、もし、進修の功を積まず、校風の美を濟さず、この校旗をして、一芻狗たるに終らしむるが如きことあらば、其の金章紫條の徳を累すの罪、それ、誰にか歸せむ。今や、國運勃興し、萬邦瞻仰す。實に、千歳の一時、吾人の當に協同奮勵すべき秋なり。爰に教へ、爰に學び、爰に其の徳を進修せしめて、益、我が校風

を發揚せしめば、この校旗の異彩は、即ち、かの國旗の日章宇内に赫々たるが如きものあらむ。あゝ、校旗の異彩は學校の異彩なり。學校の異彩は、吾人の統一せる精神の異彩なり。異彩なるかな。異彩なるかな。吾人、それ、誓つて、この學校のために、永く、この親しむべき崇むべき校旗の表示せる美德を擁護せむ。

觀戰談

昨年十一月十八日、午後二時より、藤井直喜氏の觀戰談あり。大要を左に掲ぐべし。

滿洲といへば、怖るべき土地の様考へられて居るが、それは、惡點にのみ注意するからで、必ずや、よい點のないのではない。惡點とは、冬の氣候で、遼河あたりでも、十一月廿日頃より四月の中頃までは、滿目蕭條氷を以て閉され、凍傷神經衰弱等を引き、命を落すこともあるので、現に、潜伏斥候などの斃れた例はよく聞く所です。だから、衣服を多く着、なるべく大食し、多く寝るのが、これに抗する最良の手段です。夏は蚊蠅等多く、六七の三月は雨が多く降る。併し、全體からいへば、雨量は少ない方で、從て飲用水に乏しい。だから、湯に堪へる習慣を養つておかないと移住することは出来ない、濕病に罹る者が多いのは、

この習慣に乏しいためである。然らば、良い點はといふと、雨が少ないので、空の色や月の景色が美しい。穀物の發育が至て宜しい。殊に、年中極寒酷暑のみ續くのではないから、怖るゝには足らない。今度の戰で勝つた理由は多からうが、上下一致して敵に當つたのも、一原因かと思はれる。宿舎、道路、井水、休憩所等まで、互に便利を計り、非常に公共心が盛で、互に助け合ふのであるだけ、我が軍の一致といふ精神に大刺戟を與へたのであるまいかと考へられる。次に、我が國人は、支那人を誤解して居る。彼れの中流以上は、禮節あり、約を守り、財産は豊富なり、吾々の意外とする所です。

尙、氏は自ら防寒具を着して示され、大に感動を與へられたり。

元諸先生その他の凱旋

溝部壯六上野富五郎の兩先生は、夙に後備歩兵第四十二聯隊に從ひて出征中なりしが、昨年十二月目出たく凱旋せられたり。猶、我が校出身の諸君にし、豫て軍に從ひ、遠く、胡沙吹く滿洲の野にありしもの、相前後して凱旋せられたるは、これを報ずるだに、愉快を覺ゆるなり。記して以て、聊か祝意を表す。

桂伯の來校

軍國の總理大臣桂太郎伯、冠を掛けて閑散の身となり、展墓にとて此の郷に歸り給ひしが、三月五日といふに、駕を任けて我が校を訪ひ給ひ、親しく巡りて授業を參觀し、さて、一同を會して、

私の幼少の時に、中谷正亮といふ伯父が私の室に居て、いつも坤輿圖式といふ書物を説明せられよつた。それで、私は日本の小さいこと、世界の大きなことを知つて、いつとなく、國家に貢獻しなければならぬといふ考をおこした。

とて、趣味ある經歷を語りて人々を戒め給ひぬ。萩出身の新進政治家に此の人ありと聞えたる、前の内閣翰長柴田家門氏の同行し居給ひしはうれしかりき。

第六回卒業式

指月公園の櫻花まだ咲きもやらぬ三月廿七日、本校第六回卒業證書授與式は舉行せられぬ。午前十時一同着席、校長は、六十一名の卒業證書を總代に授與せられ、新谷太兵衛中子徳一外百十八名の生徒に褒賞を授與せらる。校長の告辭朗讀、知事の告辭(代

讀)あり。かくて。卒業生總代和田涉は、例の流麗なる口調を以て答辭を朗讀せられて、式を終へたり。

卒業生徒氏名

和田 涉	堀 俊雄	新谷太兵衛
中子徳一	井土 欽一	田村繁人
森重 操	口羽順藏	繁澤利往
堀永伸三	上 堀太郎	石津半治
田中武雄	岡 萬藏	森重忠作
阿川與一	大深眞輔	福本義亮
佐々木竹四郎	榑崎豊樹	高木良輔
震妻準二	山本良輔	長谷千代一
石村勘次郎	長井寛治	三浦惟一
溝部九一	柏村堅吉	白杵嘉幸
岡藤甚三	松野研一	平島哲郎
堀澤 正政	大中秀次	山本爲善
渡邊幾輔	山縣四郎	青野直彦
宮原道廣	永井要輔	石原忠亮
金子精一	藤井龜松	加藤保一
杉山判治	山本敏造	山科元二

奥田 又助	木村六郎	松尾民治
長澄市衛	西山七郎	鹿野政一
讀井毅一	三好謙一	井山謙輔
小田太吉	栗栖康生	波根又介
伊藤 八郎		

指月會の發展

一昨卅七年十月、我が第一回卒業生なる二三諸氏の發起にて、始めて、東京に呱呱の聲をあげし指月會は、今や、通常地方特別の諸會員合せて百名の多きに達し、例會を開くこと既に五回に及び、更に、機關として、指月會雜誌の發行を企て、遂に、去る四月三日、河野通毅大谷清記兩君の手によりて、第一號の發刊を見るに至れり。吾人はこれを讀みて、此の會の大抱負を解し、深く、その母校に對する好意に感激したり。會運益隆昌に赴き、完全なる發達を遂げんこと、これ吾人の祈りて止まざる所なり。

本校日誌

三十八年五月

八日 陸上大運動會舉行。

十日 眞鍋中將來校。

十七日 五年對四年の柔道試合あり。

廿五日 松陰神社に參拜し、越ヶ濱に遠足す。

廿七日 父兄保證人會を催す。

三十日 我が選手三十餘名萩警察署の擊劍試合に赴く。

三十一日 擊劍臨時大會を開く。

六月

五日 日本海々戰の祝勝式を舉行す。

九日 本日より四日間臨時試験。

十五日 渡邊知事來校。

七月

十日 本日より六日間學期試験。

八月

三十日 塚本校長の告別式あり。

九月

二十日 羽石新校長の就任式舉行。

十月

十二日 校長山口へ出張。
 十四日 校友会の撃劍柔道庭球の三部選手及後援者山口へ向ふ
 十六日 三見に遠足。
 十八日 開校記念式及校旗發表式あり。午後賛濟會を橋本川に催す。
 廿九日 柔道撃劍大會あり。
 十一月
 十三日 本日より四日間臨時試験。
 十七日 大元帥陛下伊勢へ行幸につき休業す。
 廿二日 父兄保證人會開催。
 十二月
 一日 五年對四年の野球試合あり。
 十四日 本日より六日間學期試験。
 三十九年一月
 十六日 本日より撃劍柔道寒稽古始まる。
 廿五日 大澤教員の告別式あり。
 二月
 十一日 撃劍大會を開き、柔道撃劍寒稽古皆勤者に賞状を授與す。
 十二日 校長山口へ出張。
 十三日 柴田家門氏來校。
 十九日 本日より三日間臨時試験。
 三月

二日 住永教諭告別式あり。
 三日 父兄保證人會開催。
 五日 桂伯來校。
 六日 相島教員の就任式あり。
 十日 本日より七日間學年試験。
 十八日 校長山口へ出張。
 廿五日 本日より二日間共通入學試験。
 廿七日 第六回卒業證書授與式舉行。
 四月
 十一日 新入學生徒の入學式。中島教諭の就任式。始業式。
 十三日 山本教諭の就任式あり。
 十六日 廣瀬教諭の就任式あり。
 廿六日 校長學事視察のため上京。
 廿八日 陸上大運動會舉行。未曾有の盛會なり。
 五月
 十日 萩町執行の日露戰役戰歿者の招魂祭に參拜す。
 廿日 庭球大會舉行。
 廿一日 有地海軍中將來校。
 廿五日 松陰神社に參拜し、小畑附近に遠足す。

編輯餘滴

○紙數は少なくしなければならず、載せることは未曾有の多量で、こんなに困つたことはありませぬ。
 ○第二回卒業生上原太一君は、清國に歸化して、武官となり、將辨學堂に居られるとのこと。愉快愉快。
 ○第二回卒業生阿武清君は、海軍兵學校を優等で出られて、恩賜の望遠鏡を頂かれましたとさ。
 ○投稿の最多かつたのは四學年であります。また長谷謙齋君の「斷雲片々」大草榮太郎君の「杉の下露」藤田秀八君の「阿武川を下る」安達茂作君の「海の朝夕」山本顯祐君の「長短歌數首、何れも詞藻欄を飾るべきもの、田原四郎君の「運動論」岡藤又七君の「山水秀麗の地果して偉人を生ずるか」杉本基良君の「三箴」佐々木四郎君の「學生の前途」渡邊孤聲君の「偉大なる回顧」藤原健一君の「未來の樂」戸田剛三君の「運動の必要を論ず」小寺俊助君の「地方少年の美風を打破するものは誰ぞ」等は、何れも名論。載せられなかつたのは残念でなりません。

校友會記事

本會役員

本年四月改選の役員左の如し。

- | | | |
|------|--------|-------|
| 副會長 | 岩田 博藏 | 大谷 壽福 |
| 擊劍部長 | 中島 豊之 | 平川 春助 |
| 委員 | 三浦 正夫 | 羽倉 市熊 |
| | 椋木 貞一郎 | 中村 樹介 |
| 柔道部長 | 缺 | |
| 委員 | 缺 | |
| 球術部長 | 高田 徳佐 | |
| 委員 | 缺 | |
| 野球 | 横見 莞爾 | 三戸 良一 |
| | 松浦 鈍一 | 村田 三介 |
| | 小寺 俊助 | 戸田 剛三 |
| | 小林 七郎 | 藤原 政一 |
| 庭球 | 證井 毅一 | 田原 四郎 |
| | 石光 憲弼 | 藤井 愛咲 |
| | 長井 次郎 | 上田 嘉一 |
| | | 松野 英一 |
| | | 安藤 芳彦 |

蹴球 益田 謙 水間 美繼 彌政 竹雄
濱屋 七平 福田 敬二 堀 正一
平佐 幹 田中 貢 原田 正三
森重 賢作

短艇水泳部長 相島 直一
委員 缺

文藝辯論部長 河野 厚造

委員 岡藤 甚三 田原 四郎 三浦 正夫
堀田 幾太郎 水間 美繼 椋木 貞一郎
佐藤 夏文 小倉 誠一 彌政 竹雄
濱屋 七平 田坂 榮助 福田 敬二
堀 正一 田中 貢 平佐 幹
藤原 政一 森重 賢作

校友會の三事業

○運動會場の整頓 埒及び來賓席假屋を永久的の設備とすることは、雨谷前々會長在世中の大計畫なりしが、本年四月に至り、始めて出來上り、大に運動會の面目を改めたり。

○練習船の製造、塚本前會長の在職中、和船三隻の建造に着手し居たりしが、昨年九月に至りて完成し、嵐、千鳥、早瀬と命名せり。

一等 森重 忠作(三勝) 二等 水井 精

三等 川上 元一 四等 品川 庸平

職員競争

一等住永先生、二等塚本校長 三等河野先生

各級選手

一等 寺田幸吉(補) 二等 中村樹介(四)

三等 末永柳一(五) 四等 西村義久(二)

五等 石津乙磨(三)

小學校選手競争

尋常科 一等 山本政雄(白水)

二等 池村一(明倫) 三等 金子正一(明倫)

四等 上田壽良(白水)

高等科 一等 小林保信(明倫)

二等 田坂益一(椿西) 三等前原宗一(白水)

第七回陸上運動會(明治三十九年)

未曾有の大捷を謳歌する聲は全國に普く、凱旋大觀兵式は近く舉行せられんとす。此の時、本校校友會も亦、四月二十八日を以て、陸上大運動會を開かんとす。篠つく雨をも顧みず、全校舉りて準備に怠な

○賞牌制度の本會各部の褒賞は、主として賞品によりたりしを、本年四月に至り、銅牌銀牌金牌等の賞牌を主とし、褒狀賞品を以て補助とすることに改めたり。

第六回陸上運動會(明治三十八年)

時はこれ五月八日、降り續きし五月雨も、指山一帯の白霧と立ち去りて、斷雲迷へる空に、早くも一發の銃聲は轟きぬ。山口より招きし防長教育會音楽隊は、絶えず、勇まじき樂を奏し、運動場の北門には、三年生の作りし綠門嚴しく立ち、幾旒となく翻れる色旗にも、健兒が銳氣の滿てるを覺ゆ。運動は午前八時に始まり、午後六時に終り、正午の休憩後は、來賓への餘興として、臨時に新聞を發行して興味を添へたり。四百の健兒が唱へし皇室の萬歳本校の萬歳の聲には、天地もどよむばかりなりき。

早駈千メートル

一等 青野 直彦(三勝) 二等 佐々木竹四郎
三等 來島 元助 四等 田坂 榮助

特別障礙物

く、新設せられたる來賓席を始とし、丹精を凝らせる二年生の迎賓門あり、正面には、中字形の大綠門三年生によりて建てられ、洒麗なる音楽堂は場の中央に立てり。此の日、朝來の雲霧漸くにして霽れ、清風徐に吹きて肌に適す。午前九時、轟然たる烟火と共に開會。競技は豫定の通進行し、些の怠慢なく些の支障なし。諸種の新競技を加へたることゝて、一回一回、興味愈加はる。殊に、抽籤競争の滑稽にして無邪氣なる、觀るものをして抱腹絶倒に堪へざらしめたり。生徒の組織せる音楽隊は絶えず奏樂して、興を添へたるは、謝せざるべからず。競技は最後の一回を残すに當り、武裝せる生徒に護せられたる校旗は、喇叭吹奏の中に、いと嚴肅に臨場あり。一同これに對して敬禮を行ひ、岩田副會長は來賓に向つて挨拶ありて、校旗は再奏樂の中に退場せらる。かくて競技全く終り、一同萬歳を大呼して閉會せり。時に午後六時。

早駈六百米突

一等 來島 元助(三勝) 二等 小倉 誠一
三等 木原 直孝 四等 濱屋 七平

全

一等 中村 樹介(五等) 二等 西村 義久
 三等 羽倉 市熊 四等 阿川 景亮
 特別障碍物

一等 水井 精(三等) 二等 來島 元助
 三等 林 孝一 四等 中村 誠一
 職員競争

一等 相島先生、二等 藤原先生
 三等 田中先生、四等 中島先生、
 小學校選手競争

尋常科、一等 堀尾英一、(明倫)
 二等 矢野常安(明倫) 三等 有田正熊(椿西)
 高等科、一等 大久保虎一(明倫)

二等 岡市 熊(椿東) 三等 岩本慶之進(白水)
 四等 藤田欽二(椿東)
 各級選手競争

一等 田坂榮助(四) 二等 中村樹介(五)
 三等 桑原雅亮(三) 四等 西村義久(二)
 五等 藤原政一(一)

説あり。先づ、現れ出てし兩雄は、味方石光、かなたは水津君なり。やつとばかりに取り合ひて、エツと脊負ひて、どつと投げ、石光の勝となり、河野君出られしも運や拙なかりけん、亦、脊負投にて石光の勝となり、續いて出てしは三浦重正君。互に秘術を盡す内、抑込にて石光を斃す。満場の拍手霞の如し。こなたは佐々木代りて出て、大腰にて三浦君を仆し、續いて藤間君をも腰車にかけて仆しぬ。いよゝゝ、かなたの副將栗原君出てぬ。さすがは副將、適の業よと見る中に、いかがしけん、佐々木の腰につり上げられ、どつと落されて佐々木に業あり、ひらりと組み伏せ抑へ込みにて合せて一本、佐々木の勝。大將緋川君は出て合ひぬ。この時満場水をうてるが如し。さすがの佐々木もと思ひの外、いかなる幸かありけん、腰車にのせてかなたの大將を投げぬ。

右終りて三本勝負あり。九時十五分全く終了せり。

紅白勝負
紅(島根)

白(萩)勝

記事

山口高等商業學校との仕合

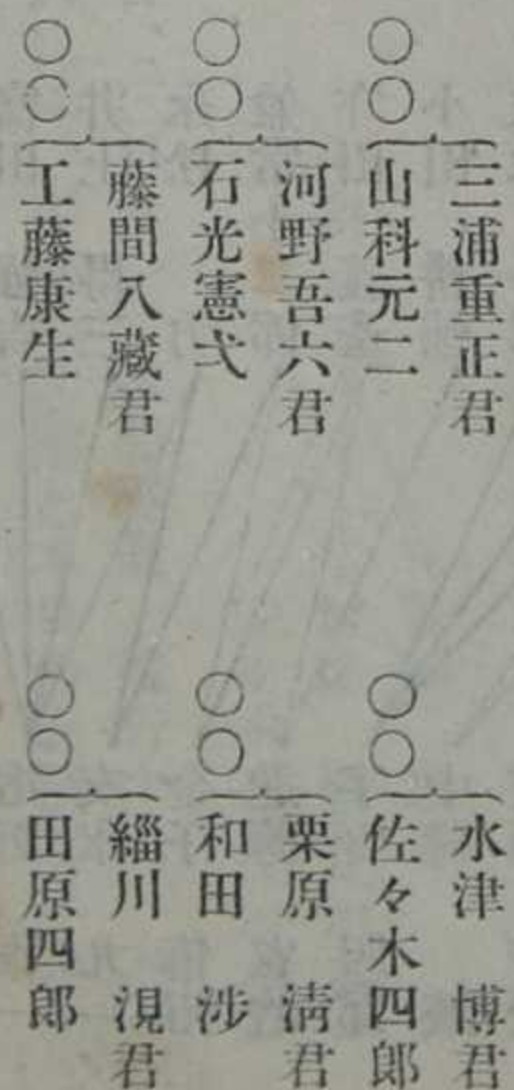
我が會擊劍柔道庭球の三部は、各選手を山口に派して、高等商業學校に就きて、教を受くる所あらんとし、昨年十月十四日、選手は岩田頓野大澤の諸先生に率ゐられて出山し、十六日午前庭球午後柔道十七日午前擊劍の仕合をなし、午後、一同山口を發して歸校したり。此の仕合につきては、今、多く報ずるを得ざれども、各部とも、今後大に奮勵して、技術の發達を計らざるべからずといふ。

擊劍柔道部記事

○島根縣立第二中學校との仕合 島根縣立第二中學校は、我が請を快諾し、遠くその選手を送られ、茲に、明治三十八年七月廿四日、我が校未曾有の盛觀を以て、一大仕合を催すことを得たるは、我等の光榮として感謝する所なり。

柔道仕合

午前八時十分、兩軍相對して席を取り、凜たる勇氣四邊に滿ちぬ。塚本校長の告諭、來賓野村子爵の演



擊劍仕合

引きつづき九時三十分より、擊劍仕合あり。島根方を紅とし、我を白とす。紅坂根君、白大塲は紅の業勝りて胴にて紅の勝、白大谷坂根君の面を取り、紅三浦君と争ひしが、胴を切られて負。白の青野、突にて紅三浦君をつき、更に副將泉君の胴を切る。紅

の大將大谷君出て、青野の胴を取る。白の大將末永
胴を切つて大谷君を斃す。
次で、二回の三本勝負あり。塚本校長の演説ありて
閉會せり。午前十一時なりき。
紅白勝負

紅(島根)

白(萩)勝



三本勝負

○坂根 勇君

○三浦稔山君

○吉岡良平

○大谷壽福

○泉常次郎君

○大谷健一君

○末永柳一

○青野直彦

三本勝負

○坂根 勇君

○三浦稔山君

○大谷壽福

○吉岡良平

○泉常次郎君

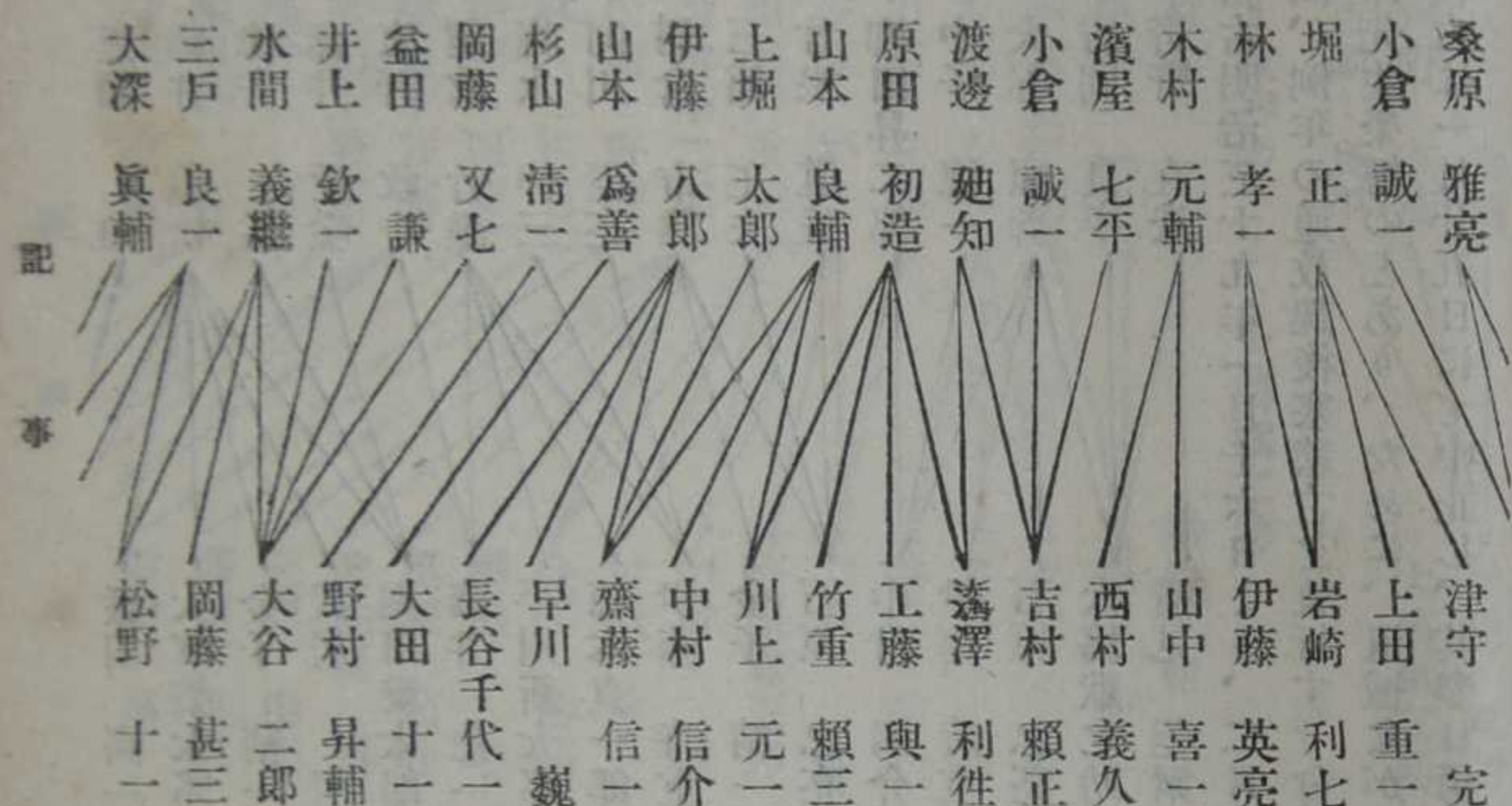
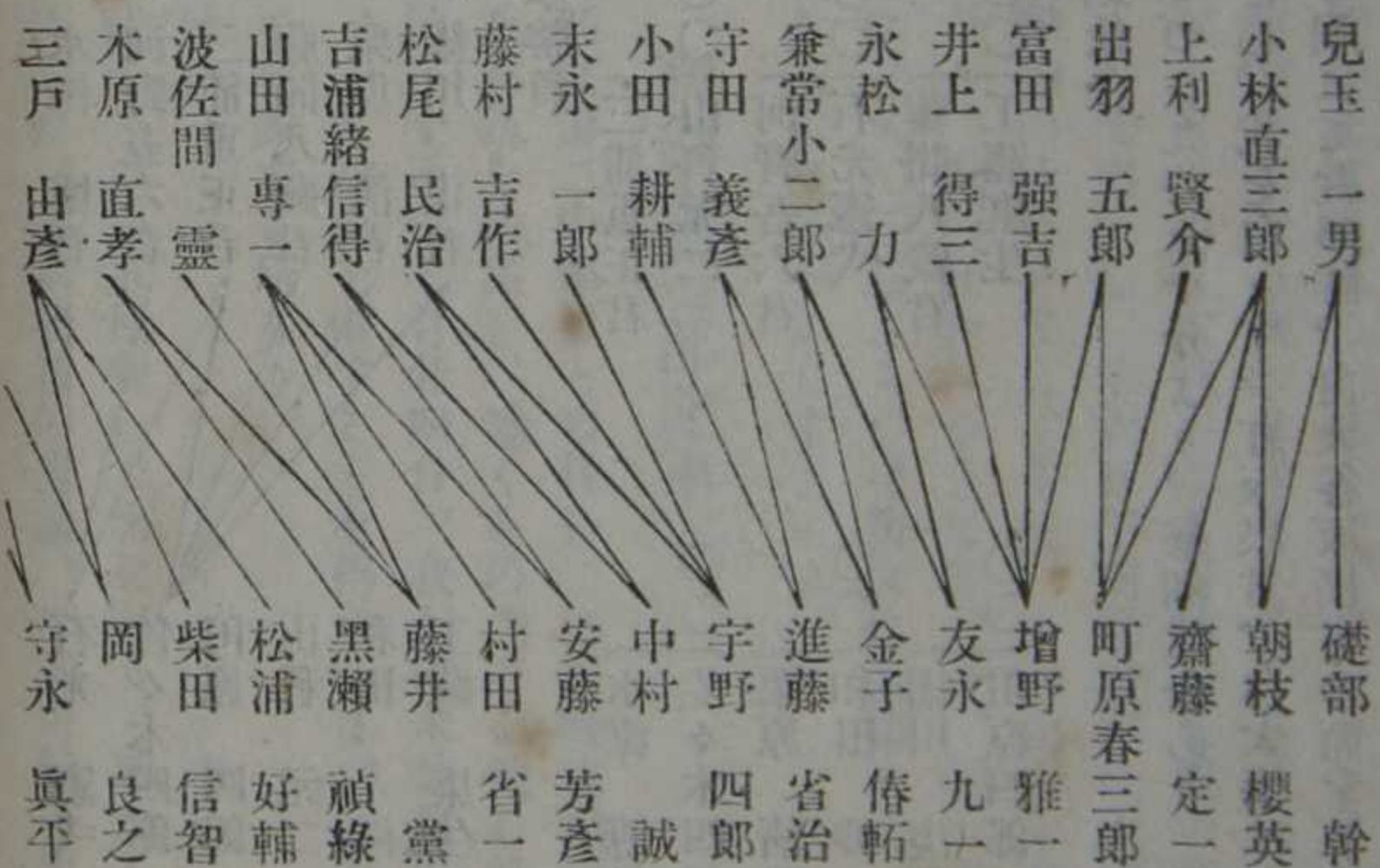
○大谷健一君

○末永柳一

○青野直彦

○秋季大會(三十八年十月二十九日)
柔道●紅組(勝)

白組



記事

當日、三戸良一 水間義繼 松野十一 大谷二郎
の四氏は、平素の勉勵と本日の成績とにより、目出
度青年組四級に進級せられたり。

撃劔●紅組(勝)

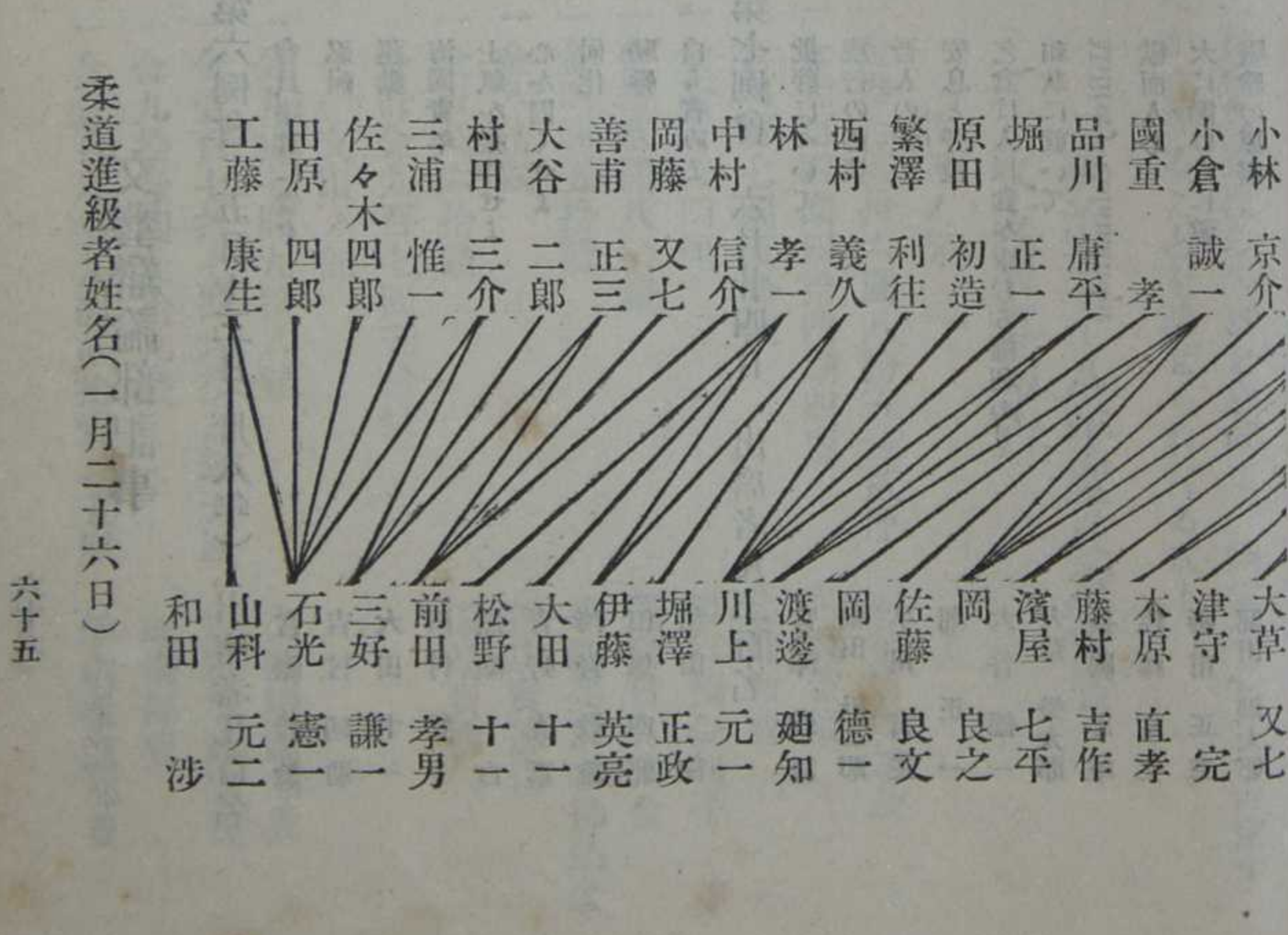
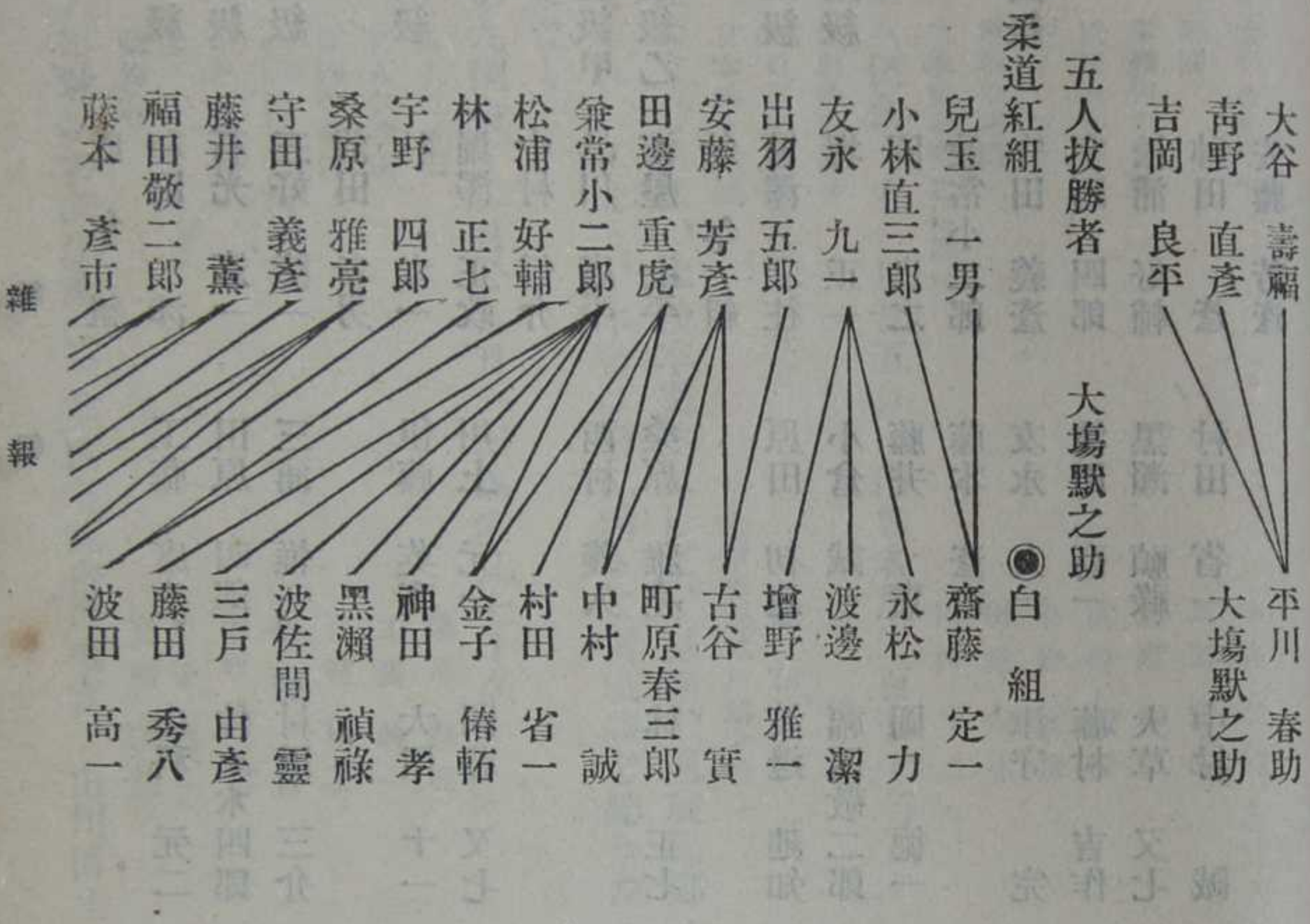
白組



六十三

○寒稽古明治三十九年一月十六日より、二月五日迄三週間、例年の通放課後寒稽古を執行す。會柔道師範大澤先生榮轉のとあり、ために、遺憾ながら、柔道寒稽古は一月廿五日にて中止し、其翌日勇壯なる

試合を催し、夥多の進級者ありたり。擊劔寒稽古は、玉木師範の熱心なる指導のもとに、首尾よく二月五日迄引續き二月十一日活潑な試合をなし、終て擊劔柔道寒稽古皆勤者七十人に賞状を授與したり。



成年組	和田 涉	工藤 康生	山科 元二
一級	石光 憲一	田原 四郎	佐々木四郎
二級	三好 謙一	三浦 惟一	村田 三介
三級	前田 孝男	伊藤 英亮	大田 十一
四級	堀澤 正政	川上 元一	岡藤 又七
五級甲	品川 庸平	西村 義久	林 正七
五級乙	濱屋 七平	桑原 雅亮	
幼年組	幼 年 組		
二級	繁澤 利往	原田 初造	渡邊 勉知
三級	堀 正一	小倉 誠一	福田 敬二郎
四級	岡 良之	藤井 薫	岡 徳一
兼常小二郎		藤本 彦市	津守 完
守田 義彦		友永 九一	波田 高一
宇野 四郎		松浦 好輔	黒瀬 禎祿
松浦 好輔		神田 彦	村田 省一
安藤 芳彦			中村 誠

文藝辯論部記事

第六例會 五月十三日(卅八年) 出席者凡百名

- 會員諸君に告ぐ
- 忍耐
- 運動
- 海國青年
- 士氣を振作せよ
- 心を固くせよ
- 同化
- 恥辱
- 自ら省みよ
- 第七例會 六月廿四日 出席者凡三百名
- 批評について
- 旅行の必要
- 吾人の覺悟
- 安息と勞役
- 乞食は人に食を求むる權利あり
- 和歌に就いて
- Military Commander
- 獸面人心
- 大に働け大に遊べ
- 戰勝の原因
- 宮澤 教諭
- 吉村 延助
- 大田 十一
- 田村 壯介
- 黒瀬 白
- 青野 直彦
- 河野 教諭
- 田原 四郎
- 和田 涉
- 和 正一
- 早川 富正
- 大谷 徳一
- 大草 榮太郎
- 長岡 忠雄
- 佐藤 良文
- 善甫 正三
- 堀田 幾太郎

The Custom

- 時間
- 軍艦内の任務
- 國民的宗教
- Benoit Jones
- 理想の英雄
- 中學生の理想に就いて
- 印刷術の進歩
- 山口高等商業學校との仕合
- 日本海々戰談
- 海軍少尉三戸基介君
- 三戸基介君は、本校卒業生にして、這回、凱旋歸郷せられしにより、本會は君に請うて實戰談を聽きたるなり。
- 水間 美繼
- 高田 教諭
- 養妻 準二
- 檜崎 豊樹
- 春野 直彦
- 田原 四郎
- 山科 元二
- 堀 俊雄
- 和田 涉

第八例會 十一月廿五日 出席者凡三百五十名

第九例會、二月廿八日 出席者凡七十名

- 人となる法
- 吾人の責任
- 朝鮮の事情
- 熱誠剛毅の精神
- 天然の教訓
- 夢
- 幽靈論
- 岩田教諭の幽靈論は、英國議院内の事實、山川博士
- 桑原 雅亮
- 工藤 興一
- 吉村 賴正
- 黒瀬 白
- 石村 勘次郎
- 中子 徳一
- 岩田 教諭

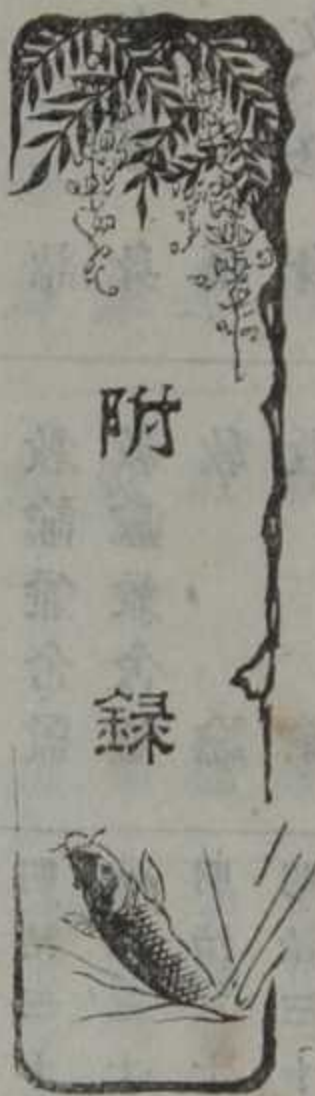
の實驗等諸種の事實を擧げて、幽靈の必しも否定すべからざることを論ぜられたるなり。

明治三十八年度校友會費

收支決算報告

- 收入ノ部
- 一金參百五拾六圓八拾五錢貳厘 前年度繰越金
- 一金壹百四圓四拾四錢四厘 職員會費
- 一金四百七圓五拾錢 生徒會費
- 一金拾五圓四厘 銀行預金利子
- 一金拾貳圓八拾錢 運動會寄附金
- 一金四圓五拾錢 雜誌要求者拂込金
- 一金八拾錢 雜誌賣拂代
- 一金五圓六拾錢 備品賣拂代
- 合計金九百七圓五拾錢
- 支出ノ部
- 一金九拾七圓九拾八錢 文藝辯論部費
- 一金壹百七拾七圓六拾九錢五厘 短艇水泳部費
- 一金九拾壹圓九拾九錢 球術部費
- 一金壹百八拾九圓貳拾壹錢五厘 擊劍柔道部費

附 録



山口縣立萩中學校沿革略

本校はその源を舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に發せり○後改めて公立中學校となし○明治十一年五月又改めて公立山口中學校の分校となし、大に教則を改正す○山口中學校が高等中學校となり、文部省の所管に歸するや、本校萩分校と改稱し、山口高等中學校の豫備校となれり○明治廿年四月改めて萩高等小學校別科と稱し、重見經誠氏主幹となり○同年八月綿貫謙輔氏代りて職を襲ぐ○同年十二月改めて萩學校となし○廿一年一月職制の改正ありて綿貫氏校長に任ぜられたり○二十三年四月公立を廢して私立とし、私立防長教育會これを管す○然るに、三十年九月一日教育會はこれを寄附して、山口縣尋常中學校分校となし、校則の全部を改正し○同年九月廿八日綿貫氏は萩分校主事を命ぜられしが○三十一年三月三十一日教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となり○同年四月廿二日渡邊盈作氏主事に任ぜられたり。

三十二年九月一日本校は山口縣山口中學校の分校より獨立して、山口縣萩中學校となり○同日縣令を以て本校規則を發布せられ、且、職制並に事務章程を訓令せらる○同日又萩分校生徒貳百九拾參名の外、新に百拾名の入學を許し、教諭渡邊盈作氏は校長心得兼務を命ぜられ○同月十八日に至り、雨谷羔太郎氏校長に任ぜらる。○乃ち、同年十月十八日を以て開校式を舉行し、此の日を以て永く本校の紀念日となす○これより先、校舎は萩町大字江向村元明倫館跡にありしが、その獨立と共に、大字堀内村なる新築校舎に移る○三十

第一學年
計年
一七
四一
二三五
五五
八二
二五
三六
三九四
九七

明治三十八年度生徒移動表

學年	種別	入學		退學		卒業者	合計
		新入	再入	轉退	事故		
補修科	籍始	六八	二二	二	一	六	二二
第五學年	在年	七四	一一	一	一	六	六五
第四學年		六六	二	一	一	六	六一
第三學年		六六	一	一	一	六	六一
第二學年		一二	一	一	一	六	一一
第一學年		二八	一	一	一	六	二七
合計		二八七	一〇六	四一	一〇	二一	二二七

武學貸費生表

×既ニ海陸軍ニ入リシモノ

學年	補習科	第五學
明治三十七年	×佐田健一 ×木津谷泰夫 ×和田正敏	寺田幸吉 赤川義助 村田仁介 厚東洋 林東香 讚井毅一 田中義男 水津貞輔
明治三十七年		寺田幸吉 赤川義助 村田仁介 厚東洋 林東香 讚井毅一 田中義男 羽崎勝五郎 前原芳樹
明治三十八年	×寺田幸吉 ×赤川義助 ×前原四郎 ×中村芳樹 ×村田仁介	中子德一 石原忠亮 岡藤甚三 阿川環亮 福本義亮 大深真輔 青野直彦 裴妻準二 工藤康生 長澄市衛
明治三十八年		中子德一 石原忠亮 岡藤甚三 福本義亮 大深真輔 青野直彦 裴妻準二 長澄市衛 溝部九衛 山本良輔
明治三十九年		中子德一 森重忠作 岡藤甚三 福本義亮 長谷千代一 溝部九衛 長澄市衛 青野直彦
明治三十九年		中子德一 厚東芳介 田原四郎 三戶良一 三村五郎 羽倉市熊 松井式部 水井元助 來島元助

第二回(明治三十五年三月卒業)

山口高等商業學校	林新	東東國學院	粟屋周祐
東京帝國大學工科大學	永田民也	越後國中蒲原郡村井石油部	山根省三
東京商船學校(目下練習中)	和田準介	小口鑛場在勤	菊屋孫輔
海軍少尉候補生	阿武清	京都帝國大學法科大學	山根孝一
在濱田	石津御楯	陸軍士官學校	柿並誠一
長崎醫學專門學校	野村正一	陸軍省在勤	上原太一
京都帝國大學法科大學	湯原綱	在清國保定府將辦學堂	三宅彌太彦
海軍少尉候補生	山本松四	現役(廣島騎兵五聯隊)	阿川義介
陸軍步兵少尉(在鐵嶺)	前田正敏	陸軍步兵少尉	河野通毅
高松郵便局在勤	土屋小七郎	早稻田大學	佐藤虎介
死亡	小澤泰二	陸軍騎兵少尉(在郷)	和田專三
未詳	林章貫	海軍兵學校	阿座上長一
山口高等商業學校	粟屋春太郎	在郷農業	木村彌三
東京外國語學校	佐伯益豐	第七高等學校造士館	渡邊五六
哲學館大學	森信丸	在郷	山本百合熊
陸軍輜重兵少尉	中村喜代藏	阿武郡福田尋常高等小學校教員	江川暢
未詳	安江楳生	陸軍步兵見習士官	青水英一
三田尻鹽務局在勤	品川鴻介	東京正則豫備校	波根良弼
阿武郡明倫高等小學校訓導	河野安宅	岡山醫學專門學校	茶川一
		在東京	增野榮三

清國廣東省民政署在勤

東京國學院

東京高等工業學校

第三回(明治三十六年卒業)

廣島高等師範學校英語科玉木ト改藤井正行	兼常清佐	大坂東洋貿易商會在勤	赤川省吾
山口高等商業學校	中村文治郎	東京郵便電信學校卒業	飯尾強介
死亡	佐古良一	目下一年志願兵	島尾平七
海軍兵學校	大田明治	海軍三等筆記	大多和作太
山口高等商業學校	中島磯治	東京高等商業學校	島田八重丸
陸軍輜重兵少尉	吉田光胤	明治大學	三浦國藏
未詳	羽根義三	現役	渡邊儀賢
在京	寺田林市	未詳	弘毅太郎
農科大學林學實科	阿部昌介	未詳	紀藤庄介
未詳	曾根昌一	東京高等商業學校	蓑妻規一
東京高等商業學校	藤井勉	未詳	山田正一
死亡	宇野英一	海軍兵學校	田村能介
農科大學實科	林壽香	海軍機關學校	田坂信一
早稻田大學	片山市太都	未詳	粟屋勝
山口高等商業學校	白上貫之助	東京慈惠病院醫學專門學校	坂本治郎
陸軍士官學校		未詳	松本淳
		早稻田大學	口羽雅介
			高木孫治
			大玉完
			中島常介

在郷 韓國京城ニアリ商業ニ從事
米國ニアリト聞ク
陸軍士官學校
在郷
慶應義塾
東京高等工業學校
農科大學獸醫學實科
三津濱大阪商船會社支店在勤
大阪高等醫學學校
現役
現役
陸軍見習士官
現役
在郷

末岡 周介
松本 民介
稻田 茂太
兒玉 省三
中野 清
杉 道助
篠原 五郎
厚東 健二郎
波多野 晋平
田中 唯一
内 田 贊
八谷 俊一
上田 米太郎
片山 熊雄
永富 儀三郎

山口高等商業學校
第五高等學校
現役
未詳
陸軍士官學校
神戶燐寸會社
未詳
三池炭坑在勤
陸軍士官學校
陸軍士官學校
海軍兵學校
東京商工中學補習科
第七高等學校造士館
第三高等學校
山口高等商業學校
東京高等工業學校
廣島縣鹽原稅務署在勤
未詳
未詳
在郷

兒玉馨四郎
林 俊香
白根 政輔
中村 良弼
寺西啓太郎
山下盛太郎
宮原 藤吉
木津谷泰夫
松尾 英一
乃美 忠次
杉山 俊亮
安間 定次
福田 信彦
久保田庄作
三浦 九一
村田 發太
兒玉 武男
吉見 市郎
藤井 晴一
新庄 順一

第四回(明治三十七年三月卒業)

札幌農學校
津田ト改
陸軍士官學校
海軍兵學校
神戶高等商業學校

厚東 武雄
香積 見弼
佐田 健一
佐々木 義彦

明倫高等小學校教員有吉ト改
一年志願兵(濱田)
在東京
東京外國語學校
岡山醫學專門學校
陸軍士官學校
早稻田大學
陸軍士官學校

小池 武彦
正木 孝介
根來 行藏
信國 武尚
井 田 晋
西村 昌一
笹原 孝一
山田 昌介

本校補習科

未詳
未詳
未詳
未詳
海軍兵學校
鹽務局在勤
第七高等學校造士館
萩町役場在勤
未詳
未詳
東京商船學校
未詳
現役(四十二聯隊)
岡山醫學專門學校
在東京
未詳
未詳
陸軍士官學校
山口高等商業學校

伊藤 傳次
室谷 貞一
山本 公介
佐古芳次郎
植 木 秀
能美 留壽
高橋熊太郎
浮里 俊道
青原 忠一
今井 武方
吉武 傳一
横田 三介
井上 正作
原田 信藏
山田 俊治
中村 敏介
桂木 庄市
村橋 孫市
和田 正敏
木村 精男

第五回(明治三十八年三月卒業)
中央大學
第六高等學校
哲學館大學
中央大學
海軍兵學校
在郷
陸軍士官學校
陸軍士官學校
在東京
早稻田中學校補習科
陸軍士官學校

大谷 清記
大賀 幾太
榮 正範
仲 義輔
寺田 幸吉
前原 四郎
大谷 卓三
南方 秋亮
中村 芳樹
大田 三郎
村田 仁介

慶應義塾
本校補習科
明倫高等小學校教員
椿東尋常高等小學校教員
在大坂
惠迪尋常小學校教員
岡山醫學專門學校
本校補習科
枝光製鐵所在勤
早稻田中學校補習科
明道中學校補習科
在郷
陸中國小坂鑛山用度課事務處
在郷
未詳
兵庫鐘紡社々宅
早稻田大學
本校補習科
長崎醫學專門學校
大坂高等工業學校

中村 助順
横地素之進
赤川 義助
林 香
村井 俊二
羽崎勝五郎
下瀬 政三
厚 東 洋
野村 英一
大田健太郎
増野 純亮
笹原 武一
百井 盛二
河野 利長
高橋 信一
國 弘 壽
吉富 嘉春
坪井 海乘
岡田信太郎
落合 兼文

一年志願兵(濱田)
京都佛教大學
明治大學
哲學館大學(目下在郷)
一年志願兵(山口)
白水尋常高等小學校教員
中央大學
未詳
佐々並尋常高等小學校教員
在郷
私立東京高等農林學校
瀬戸崎尋常高等小學校教員

神崎 一郎
河名 識雄
田中 義雄
藤津 亮然
中村 正治
堀 兼 治
口羽 素介
日 比 豊
水津 貞輔
東谷 光亮
國重 熙
山田 八郎

會 告

- 一 今回は、原稿非常に多かりしかども、經費に制せられ、やむなく没書したるもの多かりき。乞ふ、これを諒とせよ。
- 一 原稿は、總て、漢字は楷書、假名は平假名にて認め、用紙は本校作文用紙とす。
- 一 原稿には苗字と雅號とを併用するも差支なし。
- 一 卒業生諸君の寄稿は、毎年四月末日までにせられたし。用紙は任意。
- 一 卒業生諸君にして、本誌を要する方は、毎年四月末日までに、金拾貳錢(切手にてもよし)送附せられたし。

明治三十九年六月二十二日印刷
明治三十九年六月二十五日發行

(非賣品)

發行 兼 編輯者 山口縣阿武郡萩町第百五番屋敷居住士族
品 川 精 一

印刷者 佐久間 衡 治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀 英 舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

669p
22cm

秋中學校
寄贈

